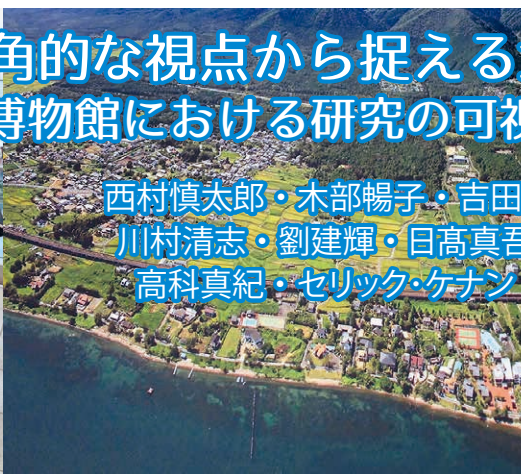


新しい地域文化研究の 可能性を求めて

2021.11
Vol.10

多角的な視点から捉える地域の文化 —博物館における研究の可視化・高度化

西村慎太郎・木部暢子・吉田丈人・
川村清志・劉建輝・日高真吾 著
高科真紀・セリック・ケナン 編



本文・図表：1661～1853年（元禄）から明治まで
の、河村國定による治水輸送と同時期、
・地所中村藩の年貢米輸送
その他にも各地域米輸送を行うなど、年貢
米輸送を中心としている。
・西人の荷物輸送
天和2年（1685）、江戸から手廻を輸送中に
罹難。
藩主御用輸送が中心で、民間の商品流通
にも関係する輸送船。



2021.11
Vol.10

新しい地域文化研究の 可能性を求めて

多角的な視点から捉える地域の文化
—博物館における研究の可視化・高度化

西村慎太郎・木部暢子・吉田丈人・
川村清志・劉建輝・日高真吾 著
高科真紀・セリック・ケナン 編

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

新しい地域文化研究の可能性を求めて

開会挨拶

平川 南 4

趣旨説明

吉田 憲司 6
小池 淳一 10

「第一部」 人と人をつなぐ地域文化

歴史と地域文化―福島県浜通りの歴史

西村慎太郎 16

方言と地域文化―八重山の方言と東北の方言

木部 暢子 28

環境と地域文化―滋賀県比良山麓の恵みと災い

吉田 丈人 40

映像のなかの地域文化―石川県輪島市皆月のくらしと祭り

川村 清志 52

アジアにつながる地域文化―上海・長崎・大阪という文化街道

劉 建輝 64

日々のくらしと地域文化―新潟県奥三面の山のくらし

日高 真吾 76

〔第二部〕

パネルディスカッション「博物館における研究の可視化・高度化」

88

コーディネーター…渡辺浩一

パネリスト…西村慎太郎・木部暢子・吉田丈人・川村清志・劉建輝・日高真吾

閉会挨拶

青山 宏夫

110

本ブックレットは二〇二二年五月二日に開催した特別展及び博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業関連シンポジウム「多角的な視点から捉える地域の文化―博物館における研究の可視化・高度化」(主催…国立民族学博物館、共催…人間文化研究機構広領域連携型プロジェクト「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」)をまとめたものである。シンポジウム当日の総合司会は日高真吾(国立民族学博物館)が担当した。

開会挨拶

平川 南（人間文化研究機構 機構長）



皆様、こんにちは。人間文化研究機構の機構長を務めております平川南です。本日は、私ども大学共同利用機関法人人間文化研究機構の国立民族学博物館特別展及び博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業関連シンポジウム「多角的な視点から捉える地域の文化―博物館における研究の可視化・高度化」にご参加いただき、ありがとうございます。

人間文化研究機構の国立民族学博物館と国立歴史民俗博物館は、世界的規模と大学共同利用機能をもつ博物館として、展示などをおした研究の高度化サイクルを活用してきた豊富な実績を有しています。そこで、二〇一七年度から機構の各機関と大学等研究機関とが連携し、博物館及び展示を活用して、人間文化に関する最先端研究を可視化し、他分野との協業や社会との共創により、研究の高度化を図ることを試みてきました。

現在、コロナ禍によって社会のさまざまなひずみが顕在化してきています。近年、地域社会の画一化が著しく進行してただけに、これまでになくそれぞれの地域社会の固有のあり方が今問われています。そこで、地域社会における継承すべき歴史・文化、地域固有の自然環境、さらに歴史文化資料研究から、地域の方々と我々研究者の共創によって新たな地域社会像を築いていか

なければなりません。

本日のシンポジウムにおいて、六機関の研究者が次のような視点から報告をいたします。

まず、国文学研究資料館は、県誌・市誌・町村誌よりもさらに小さいコミュニケーションである大字の歴史である、「大字誌」編さんについての報告です。

次の国立国語研究所は、方言と地域文化の報告です。いま世界全体の言語が六〇〇〇〜七〇〇〇あるうち、約二五〇〇が消滅危機言語といわれています。アイヌ語もそうですし、それから琉球列島の各島のもの、あるいは八丈島の言葉といったものが非常に消滅の危機にあります。そのような状況のなかで、国語研が可視化・高度化の事業として、方言の価値というものを地域の人たちに理解していただくために、方言と地域文化の関係を報告いたします。

次に、「環境と生業」という、それぞれの地域がおかれた固有の自然環境、それに伴う生業というものの関係を明確に分析するという総合地球環境学研究所による報告です。

それから、民俗学 (Folklore) の民俗誌映像に関する歴博の報告、その次にアジアにつながる先進文化のルーツについて国際日本文化研究センターの報告をいたします。さらに、民博からは山に生かされた暮らしなど、フィールドワークを基盤とした新たな地域社会像の創生を目指した研究成果を報告いたします。

本シンポジウムでは、「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」の成果を報告するとともに、地域文化研究が被災地復興にどのような役割を果たしてきたかを考えてまいります。どうぞ、最後までごゆっくりお聞きください。

開会挨拶

吉田憲司（国立民族学博物館 館長）



皆さん、こんにちは。国立民族学博物館（みんなく）館長の吉田憲司でございます。新型コロナウイルス感染症の拡大によりまして、大阪府に緊急事態宣言が発出されるという状況のもとで、全面オンラインでの開催となりました。今日はようこそ、私も国立民族学博物館でのシンポジウムといいますが、みんなく発のシンポジウム「多角的視点から捉える地域の文化」にお集まりいただきました、ありがとうございます。

みんなくは現在、緊急事態宣言を受けて全館臨時休館となっておりますが、このシンポジウムはみんなくでの開催の会期中で、いま臨時に公開を中止しております特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」の関連イベントとして開催するものです。と同時に、みんなくの所属する人間文化研究機構が、機構全体の事業として過去五年間展開してきた事業、「博物館展示を活用した最先端研究の可視化・高度化」という事業全体を振り返って、その展開を展望しようという狙いのもとで開催されるものです。

3・11、東北地方の太平洋沿岸を巨大津波が襲った東日本大震災からちょうど十年がたちました。私自身は、あの日、三月十一日には三陸の宮古に前の晩から泊まっていた、朝、宮古を出て、北の

久慈に着いて、久慈で地震に遭いました。その後、盛岡に出て、そこで数日間避難をしておりました。それから、大阪に戻って、被災地から離れたこの大阪にいる自分に、あるいは自分が所属している博物館という装置に何ができるのかというのを自問してきました。

震災の直後、地域コミュニティそのものの存続が危ぶまれる中で、芸能どころではない、祭りどころではないという声も地元で聞かれました。が、実際には、被災地ではその年、例年以上に祭りや芸能の奉納が活発におこなわれました。私は、震災の年の夏の釜石の港祭りで、瓦礫の山の中で「虎舞^{とらまい}」が練り広げられるその光景を目の当たりにして、人間の生―生きること、存在、そしてコミュニティの存続にとっての、有形・無形の文化遺産の核心的な価値を改めて認識させられました。震災からの復興に当たっても、地域の祭りや芸能は人びとの結束のよすがとなり、また、新たな地域コミュニティを立ち上げていく上での原動力になったように思います。

一方で、こうした文化遺産の復興の背後にはさまざまな形の復興支援がありました。私たち国立民族学博物館も、同じ人間文化

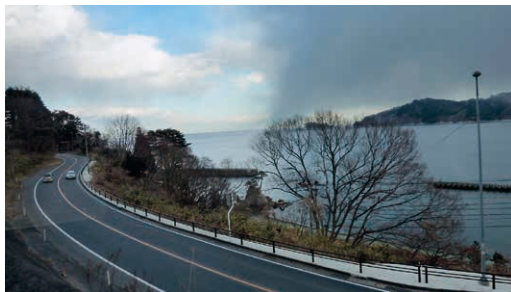


図1 岩手県、波板海岸。2011年3月10日。
三陸鉄道列車内から。不気味な空の様子
に思わずシャッターを切る。

研究機構に属する国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、そして総合地球環境学研究所などと連携して復興の支援に携わってきました。今回の特別展、「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」では、東北だけではなく、日本各地での災害とその復興、そして復興支援のプロセスを振り返りながら、人びとの生活復興、コミュニティの存続と再生にとっての有形・無形の文化遺産の重要性をみつめなすとともに、災害の経験を次の世代にいかに関承して、より安全な社会をどのようにして築き上げていくのかを考えています。

そして、今日のシンポジウムでは、人間文化研究機構に属する国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、そしてみんぱくのそれぞれが、日本各地の特定のコミュニティとかかわって展開してきた研究活動に焦点を当て、その成果をどのように目に見える形にして、当該の地域コミュニティの人びとと共有できるようにし、地域の活性化に貢献するとともに、研究そのものを高度化してきたのかをお互いに披瀝し合い、検討し合うことになりました。その作業を通じて、これらの活動全体を支えてきた人間文

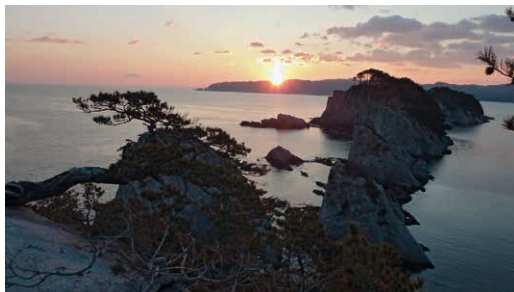


図2 岩手県、浄土ヶ浜。2011年3月11日朝、6時07分撮影。この8時間後に、巨大津波がこの地域を襲うとは、思いもしなかった。

化研究機構の「博物館展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」の成果を検証し、今後の可能性を考えてみようというわけです。

私自身、これまでに数々の展示を担当して、展覧会活動をおこなってきましたけれども、そのたびに実感するのは、自身の研究を目に見える展示の形で公表をして、多くの人びとにご覧いただくことで、結果的に自分の研究そのものが鍛え上げられるということでした。文字どおり研究の可視化を通じて、研究そのものが高度化されるという実感です。

今日は人間文化研究機構の六つの機関のそれぞれにユニークな活動の成果を、オンラインですけれども一堂のもとに展望して、博物館機能、展示機能を擁する人間文化研究機構の活動の今後の可能性を考えてみる、またとない機会にめぐり会えたと思っています。登壇される皆様の活発なご議論に期待をしております。

最後になりましたが、今回のシンポジウムを企画していただきました人間文化研究機構の平川南機構長はじめ、関係者の皆様に御礼を申し上げます。このたびは本当にありがとうございました。では、今日は最後までどうぞよろしくお願いいたします。



図3 「釜石夏の港まつり」での虎舞。2011年7月11日。

趣旨説明

小池 淳一（国立歴史民俗博物館 教授）



みなさん、こんにちは。本日はシンポジウム「多角的な視点から捉える地域の文化」に御参加いただき、まことにありがとうございます。

私は国立歴史民俗博物館で日本民俗学を中心に調査研究をしています小池と申します。のちほど登壇される国立国語研究所の木部暢子先生と一緒に、このシンポジウムの基盤を構成している人間文化研究機構の広領域連携型基幹研究プロジェクトの「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」の代表を務めております。その関係でこのシンポジウムの冒頭にあたり趣旨説明を仰せつかりました。本日のシンポジウムをお聞きいただく方々のご参考になる前提やシンポジウムに至る私たちの研究上の企てといったものを少しでもだけお時間をいただいでお話しようと思います。

本日のシンポジウムに登壇される先生方は長年にわたる調査研究、あるいは実践活動を積み重ねてこられたので、それを率直に受け止めていただければよく、あまり余計な情報をお耳に入れない方がいいのかもしれませんが。ただ、多岐にわたる報告を聴いていけるなかで、参考になるような補助線がひけたらいいな、と思っております。

今日のシンポジウムは、人間文化研究機構の「地域文化」に関する研究プロジェクトを母体としていますが、このプロジェクトは、機構のなかの五機関がそれぞれユニット、すなわち研究チームを編成して取り組んでいるもので、具体的には二〇一六年から、その調査研究を進めてきました。それぞれのユニットのテーマは国立国語研究所（国語研）が「方言の記録と継承による地域文化の再構築」、国立民族学博物館（民博）が「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」、国文学研究資料館（国文研）が「人命環境アーカイブズの過去・現在・未来に関する双方向的研究」、総合地球環境学研究所（地球研）が「災害にレジリエントな環境保全型地域社会の創生」、そして私の所属する国立歴史民俗博物館（歴博）は「地域における歴史文化研究拠点の構築」というものでした。同じ日本列島上の地域を見つめ、調査をしていくなかでのとりあえずの目的、研究の目標として、人間文化研究機構それぞれの基盤機関が得意とし、また学界や社会に発信してきた蓄積をもとにこうしたテーマを設定したわけです。さらに本日は、基盤機関の一つである国際日本文化研究センター（日文研）からも地域をテーマにした御報告をいただいて、議論を深めていきたいと考えております。

つまり本日のシンポジウムは人間文化研究機構の基盤機関が共通する「地域文化」というテーマについて、それぞれの個性、独自の研究視角、簡単に言えば、こだわりを充分に発揮しつつも、同じ「場」で連続して報告をすることで、「地域文化」に対する知見や視座をさらに高度なものにしていこうという意思が込められているのです。

その背景・基盤にあるのは機構の研究の全体のテーマに掲げたように「地域文化の変貌・災害」

です。今年は東日本大震災から十年という、ちょっと聞くと節目になるような年であります。現在の新型コロナウイルス感染症の世界的な大流行という私たちの暮らしを否応なく変容させている現象の一方で、災害を常に意識し、それによつて変動を重ねてきた地域が、決定的に大きな変化に直面し、新たな段階に進みつつあるという状況の中では十年であるうが、十一年、十二年であらうが、あるいは五十年、百年経つても「地域の再構築」が不断に進行していることを忘れることなく、課題として意識していかなばならないと言えます。十年という時間の経過は、それをふまえ、恒常的・持続的な問いであることを確認するものとして意識しなくてはなりません。

本日のシンポジウムは全体として、そうした意識、こだわり、共通認識を根底にして企画されています。そして、これから報告されていくそれぞれの内容に対しては、「歴史」「方言」——ことば、ですね——といった対象、「環境」「映像」といった視点、アプローチの方法、そして「アジアにつながる」「日々の暮らし」といった地域の機能や意味がそれぞれ、タイトルに付けられています。地域の文化をこうした視点でとらえることのメリットや特徴、効果や可能性をそれぞれにお示しいただけるでしょう。もちろん、それらは各基盤機関の蓄積であり、さらには日本の人文学が地域と向き合ってきた成果をふまえ、さらにヴァージョンアップを目指したものといます。それらと本日のシンポジウムという場で相互に確認し、刺激と示唆とを交換したいのです。それとともに参加してくださる皆さんに、心に留めていただきたいのは、こうした地域文化の調査研究、実践の取り組みが個々の研究機関や研究チームの学術的な業績を提示するということが終わらせたくない、ということです。全体を見渡してきた私からの願いは、こうした地域文

化に対する研究成果を当事者の立場から、あるいは当事者となることを想定する視点やこだわりから、受け止めていただき、批判したり、吟味していただいて、御助言をいただきたいということなのです。

既にお気づきの方もいらっしゃると思いますが、地域という対象は、実はさまざまなレベルでの定義が可能な、いささか曖昧なものでもあります。地域と言った時に想定されるのは、大字のように近世、江戸時代の村落と連続する場合がある一方で、今日の行政区分、市町村なども地域に違いありませんし、もう少し広く、近畿地方とか、中部地方といった捉え方も可能です。民俗学を専門とする私などは、都道府県の区分、境界を越える生活圈や大きな買い物を購入する土地と日常生活を営む土地との関係、あるいは、かつて嫁や婿となる人間を探す範囲―これを通婚圏などと言いました―も地域だと考えるクセがあります。つまり研究の基盤をなすそれぞれの学問によって地域の定義や範囲は実に多様なのです。

それを本日のシンポジウムでは無理に統一する必要はないように思います。むしろ、そうした多様な「地域」を我々はどのように利用して、生活や日常を築いているか、「地域」の「文化」とどのように付き合っているのか。我々自身が、そうした「地域文化」の担い手、当事者であるという視点に立っていたいただき、「地域」を豊かで、多様な可能性に満ちたものとして創造的に、未来志向で捉えていただきたい、と思うのです。これが趣旨説明の場を借りて、私が皆さんに提言するシンポジウムのひとつの受け止め方です。

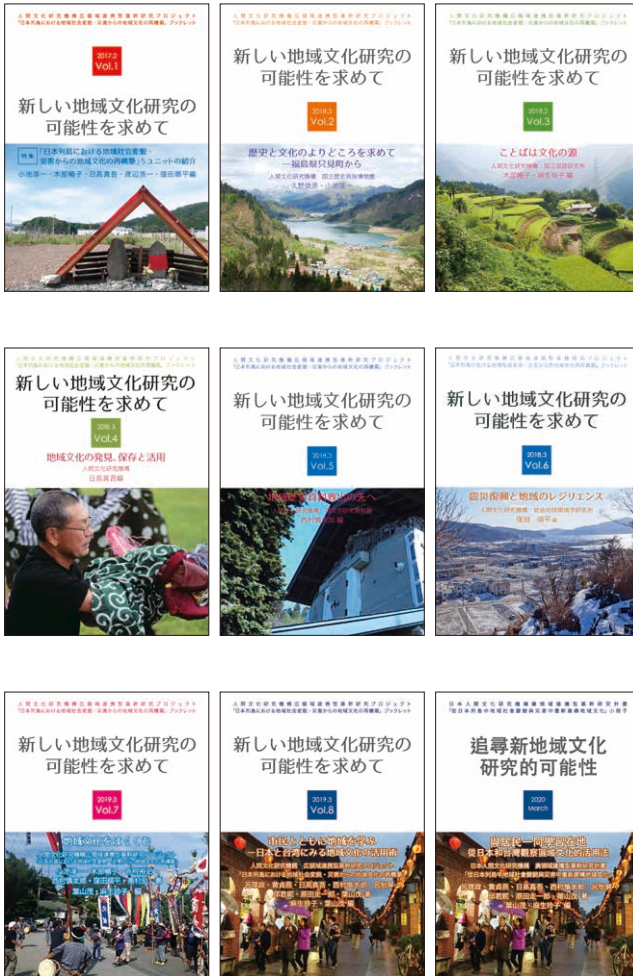
もちろん、それぞれに携わっていらっしゃる学問領域をお持ちの方もいらっしゃるでしょうし、

地域で日々、具体的に生じるさまざまな課題と取り組んでいらつしやる方もいらつしやると思います。また報告のうちのいくつかのテーマや地域に深く関わりをお持ちの方も参加してください。むしろ、そうでしょう。そうした立場や専門からの御意見や御質問を拒むわけではありません。むしろ、そうした個々の立ち位置やこだわりから「地域文化」を考えていただきたいのですが、そこにさらに、ひとりの生活者、当事者としての「地域」との関わり方、付き合い方、その可能性やポテンシャルといったものを意識していただき、ここでの議論を議論だけに終わらせることなく、未来にかなげていってはどうか、と考えるのです。いかがでしょうか。

最後に、もう一点だけ申し上げて、趣旨説明を終わろうと思います。

このシンポジウムは博物館という場を通じた研究の可視化と高度化を考えるという命題も持っています。人文学、人間文化研究の成果は、具体的なかたちや展示になじむ姿になりにくい面があります。現在、コロナ禍のため、休止中ですが、民博で開催されていた特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」は、地域文化が災害からの復興の基礎的な部分を担い、未来を形作っていく資源になっていくことを提示しようとし、さまざまな工夫や手法を試みております。それらは時には、博物館という建物を飛び出して、地域の生活のなかに直接、入り込み、訴え、有形無形を問わず、地域に影響を与えようとする場合があります。第二部のパネルディスカッションでは、博物館という情報発信のシステムが発信だけに終わらずに、さらなる可能性や研究成果を浸透させていき、地域を活性化させる一助になることも意識していただけるのではないかと、と思います。

以上で私からの趣旨説明とさせていただきます。 それでは長時間にわたるシンポジウムですが、どうか最後までよろしくお付き合いいただき、参加者のみなさんにとって、新たな認識と発見の機会となることを祈っております。 御静聴ありがとうございました。



これまで刊行したブックレット
『新しい地域文化研究の可能性を求めて』 vol. 1～9

報告1

歴史と地域文化―福島県浜通りの歴史



西村慎太郎（国文学研究資料館 教授）

ただいまご紹介にありました国文学研究資料館の西村慎太郎と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。画面は出ているでしょうか。また音声は聞こえてるでしょうか。よろしくお願ひしたいと思います。今回の報告ですけど、時間を二十分ということでしたいておりますので、早速始めたいと思います。今回の報告ですが、「歴史と地域文化」と題しまして、福島県浜通りの歴史でお話をさせていただきたいと思っています。

先ほど趣旨説明でお話が出ましたように、共同研究の一端ではございますけど、かなり個人研究も含まれたような内容になっております。そのあたりをぜひご了承いただきたいと思っています。また、今回、シンポジウムのタイトルといたしまして、可視化・高度化ということが挙げられておりますが、むしろ、今回の僕の報告は、この後、どういうふうに可視化・高度化を進めるのかというあたりをパネリストの皆さんからご提示いただけたらなと思っております。

今回の報告の課題でございますけども、以下のように書かせていただきました。「東日本大震災、

東京電力福島第一原子力発電所事故の被災地のうち、福島県浜通りの現状、歴史資料の保全とそれを地域に還元する「大字誌」という実践の検討」をさせていただきたいと思います。

まず最初に、原子力災害被災自治体の現状ということでお話をさせていただきたいと思います。こちらの図ですけど、経済産業省のホームページから持ってまいりました(図1)。避難指示区域の概念図ということで、福島県浜通り

における現在の避難されている状況を記したものになっております。ピンクで書かれているところが帰還困難区域ということで、現在でも移動の制限、そもそも立ち入りの制限、もちろん居住の制限のあるところであります。緑のところが旧避難指示区域でございます。ただ、避難指示がおさまったといいますが、こちらの地域もインフラの整備がされていなかったりとか、あるいは、後で述べますけれども、防災集団移転促進事業のために、住民が戻れない地域などが非常に多くある地域だという



図2 東京電力福島第一原子力発電所周辺自治体



図1 避難指示区域の概念図

ことでご理解いただきたいと思います。

次の写真(図2)は、Google Earthを加工しました。今回は浪江町・双葉町・富岡町での事例を挙げます。下のほうにあります大熊町につきましては現在レスキューなどをやっている最中で、今回、展示のほうでは少し出させていただきましたが、こちらについてのお話は省略させていただきます。また機会がありましたら、ぜひお話をさせていただきたいと思っています。

冒頭でお話を出させていただきましたけれども、この「大字誌」というのは、そもそも何かとこののを簡単にお話をしたいと思っています。まず、大字という単位ですが、これは区市町村の内部の行政区のことに該当いたします。多くの大字では、明治二十二年から始まる町村合併まで、一つの行政区、いわゆる村として成立しておりました。ちよつとかたい言い方になってしまいうのもう少し簡単に説明いたしますと、一番ミニマムなコミュニティが家とか家族だいたしますと、それよりもちよつと広い範囲で近所づき合い、ご近所、隣近所というのがあるかと思っています。その隣近所がさらに大きくなった、いわゆる生活圏のレベルだというふうに考えていただけるといいかと思います。

この大字誌というものに関しては、高田知和さんのご研究が非常に詳しいです。有名なところでは、いいますと沖縄県の字誌、沖縄は字誌と呼んでおりますが、これは本土復帰後に、地域の変化に対して地元の方々がいろいろ危機意識を持たれまして、世帯レベルでの記述を行うということが七十年代・八十年代から行われております。また北海道の場合ですと、開拓の歴史の記念事業という形でも行われているのが非常に多く見られます。これに関しては、アイヌの歴史との

分断があるということで、かなり批判的な取り扱い方をされているかと思っています。いずれにしても、地域の住民が歴史を明らかにするといった活動だということです。

今回の僕の報告では、四つの大字に関するお話をさせていたきたいのですが、これまで前二つにつきましては何度かお話をしておりますので、今進んでおります後者二つをメインにしていきたいと思います。まず最初は前提として請戸・両竹（うけと ともたけ）というこれまで別のところでも触れた大字のお話をさせていただきます。

一つが浪江町請戸（なみえ）というところの大字です。浪江町請戸は、東日本大震災で集落の全戸が流出しております。そして、その後、東京電力福島第一原子力発電所事故を受けまして、立ち入りが制限され、制限が解除された後も集落の中心は防災集団移転促進事業のために戻ることができないといったような地域になっております。

この大字誌に関しては、既にいろいろなところでお話をさせていただいております。もともと浪江町請戸区の住民の方々が、自分たちがもう戻ることができないので大字誌をつくりたいと。ひいては、歴史編に関しては、歴史の研究者に書いてもらいたいということで、当時東北大学の大学院生でした泉田邦彦さんに執筆を依頼しました。後でまた泉田さんは出てまいります。この泉田さんをはじめ、「歴史編」の執筆を西



図3 『大字誌ふるさと請戸』

村も含めた五人の若手研究者でさせていただいているといったものであります。これは二〇一八年に刊行しております（図3）。

この『大字誌ふるさと請戸』という本のポイントですが、住民の発案により、研究者が研究課題をそれぞれ発見し、そして大字誌を編さんしたという特徴を持ったものだと思っただきたいと思います。そして、本を編さんするだけではなくて、例えば、せんだいメディアテークというオープンスペースを借りまして、ここで地元の方々、あるいは周辺の方々にお越しいただき、シンポジウムというよりも、こちらが地元の方々と一緒に歴史の内容を共有するというような場を持たせていただいたこともありました。

また、請戸区は、先ほど言いましたが、戻ることができなくて全国に避難していて、年に一度、区の総会がありますので、その総会の場をお借りして、区の皆さんに請戸の歴史のことをお話しさせていただき、区の皆さんと交流をするというようなことをさせていただきました。これが請戸の事例です。

二点目です。これは現在も進行中ですけれども、双葉町と浪江町にまたがる両竹という地区の大字誌です。この両竹という地区はどこかというところ、請戸の南側です。ここに復興祈念公園が建設されます。

この復興祈念公園というのがどういふことかというところ、要するにここの場所に、人々の生活空間の上に国家権力が復興祈念公園を建設してしまうと。その予定のために、景観も含めて当該地域の歴史の全てが破壊されてしまうということの危機感に対して、何とかできないだろうかとい

うことで少し考えました。それで、今回、『大字誌ふるさと請戸』の「中世編」を執筆した泉田さんが両竹の出身でしたので、彼と連携いたしました。実際にクラウドファンディングという形でお金を集め、そして活動を進めるということを行いました。

活動の当初の予定は、二〇二〇年に「大字誌」を刊行しようと思っていたのですが、クラウドファンディングを募集中に幾つか課題が見えるようになってきて活動の見直しを行いました。まず、一点目が、刊行の開始というのを一年前倒しにしようということでありました。これは早いほうがいいためと書きましたけれども、もう一個ポイントとしては、オリンピックなどによって、いわゆる国家権力による復興の見える化に加担するようなことはしたくないと思い、一年前倒しにいたしました。

もう一点目は、一冊ではなくて、ブックレット形式で十年かけて一年一冊出していいこう、要するに十冊出していいこうというふうに思いました。これは次世代につなげる活動ということでもあります。三点目、これはクラウドファンディング募集中、毎日コラムを書いて地域の方々とつながっていくことを行いました。結果、目標額に対して、非常に多くのご支援をいただいたということが結果として言えるかと思っています。

現在、『大字誌両竹』一号、二号を刊行してお



図4 『大字誌両竹』第2号

ります(図4)。amazonなどでも販売しておりますので、もしご興味がある方はぜひお買い求めいただきたいと思います。この『大字誌両竹』の一つのポイントとしては、研究者が現実的な課題の中で、クラウドファンディングを用いて、大字誌の編さんをした点と思っています。

ただ、本というのは、一年に一冊だけの状態なので、もうちょっといろいろできないかなというふうに思い、二〇一〇年四月より、双葉町が住民の方々に対して出していますポータルサイトで、月に二回、「もろたけ歴史通信」というものを配信しています。現在(二〇二一年五月二日)まで七十四号まで配信しています。もしご興味がある方々がいらつしゃいましたら、検索で「もろたけ じゃんぴん」というふうに入れていただきます

と、この活動報告が出てまいりますので、ぜひご覧いただきたいと思います(図5)。

事例の三点目、富岡町小良ヶ浜というところのお話をさせていただきます。富岡町小良ヶ浜につきましては時間の都合上、どういうふうな歴史的経緯があるかについてはお話しすることを割愛しますが、現在でも帰還困難区域になっています。そして、富岡町内は、富岡町の役場の職員の方々に結成された富岡町歴史・文化等保存プロジェクト(歴史PT)と、あ



図5 『大字誌両竹』第3号に向けて稲荷迫横穴墓調査
(2021年6月6日泉田邦彦撮影)

と福島大学の阿部浩一さんを中心としたふくしま史料ネットにより、歴史資料の保全というのがかなり早い段階から進んでおります。この小良ヶ浜の資料に関してもこの中で救われました。

そして、この小良ヶ浜の大字誌の計画ですが、先ほどお話ししました『ふるさと請戸』をご覧になりました富岡町の歴史PTの方々と、あと小良ヶ浜の区長の方々でこの「大字誌」が話題になっているということで、では、西村のほうでもまずこの区有文書の整理、目録を作成して、そしてそれらを用いて大字誌の編さんをしようということに行きつきました。

小良ヶ浜の大字誌は今年度中に刊行予定になっております。ポイントは、今回の場合ですと、自治体と区による大字誌の発案、そこに研究者が入っていったということになっています。

次の事例は、現在やっている話で、実はこの話を今日のメインテーマとしたい部分でございます。浪江町権現堂の大字誌でございます。浪江町権現堂というのは、陸前浜街道のいわゆる浪江宿、近世の途中までは高野宿と呼んでおりましたが、寛政年間に浪江という名前に変わっています。この高野宿、浪江宿を抱えている村が権現堂村という村でした（図6）。現在では、JR常



図6 権現堂城（2021年2月11日筆者撮影）

磐線の浪江駅がこちらにあります。

権現堂というところは、二〇一七年三月に避難指示が解除されております。避難指示解除ということで多くの人が戻っておりますけれども、一方で、急激な国家権力によります創造的復興のために、多くのものが失われている。後でも述べますけれども、一方で地域住民からすると、「ちよつともう自分たちの知っている浪江じゃないから戻れないよね」「戻らないよね」というふうな発言も聞いております。

そのような中、二〇二一年一月に福島県立博物館ライフミュージアムネットワークのオープンディスカッションにおきまして、「浪江の記憶の残し方・伝え方」というところで、西村が登壇させていただきました。その際に、浪江町の権現堂の方々お二人と会うことができました。ぜひ、権現堂の大字誌というのを残したいんだと。そこにはやはり創造的復興というような、自分たちとは違う復興形態になっているということに対する嘆きもあったのかなというふうに思います。

そこで、今年の三月一二日午前五時四十四分に『大字誌浪江町権現堂』（仮）編さん室、調査



図7 ブログ『大字誌浪江町権現堂』（仮）編さん室、調査日誌]

日誌」というブログを立ち上げて、今日まで毎日更新を続けております（図7）。この三月十二日午前五時四十四分は何かというと、二〇一一年三月十二日午前五時四十四分が東京電力福島第一原子力発電所による事故によって避難指示が出されたとき、要するに、この段階から権現堂に人がいなくなってしまうって、最終的にはあそこが廃墟のような状態になってしまった。その発端がこの時だということで、三月十一日ではなく、むしろ、原発事故に由来するものということであえてこの時間に設定をさせていただきました。ご興味がある方々はぜひご覧いただきたいと思います。

この大字誌の計画ですけれども、自分自身、権現堂に行ったことがないわけではないのですが、ほとんど知らない地域のために、むしろこれまでの自分がやっていた研究の手法とは違って、研究者が権現堂の歴史を一から学び、調査している様子をブログで配信するという形態をとっております。おかげで、毎日ブログを更新することで浪江町に住んでいた方々、あるいはその関係者からコメントや連絡、これはFacebookだったり、LINEだったり、あるいはブログ上だったり、また古文書の提供などもいただいております。浪江町内でも帰還困難区域になっている方が、親戚の古文書だということでお持ちいただいたものなどがございます。また、権現堂出身の歌人でもあります三原由起子氏によって、Facebook上にこの大字誌の倶楽部などが開設され、現在、そこでいろいろコメントなどをいただいております。

こういった方法ですけれども、ちょっと言い方が正しいかどうかかわからないのですが、私自身は、Nizi Project的パブリック・ヒストリーの可能性というふうに呼んでおります。Nizi Project

につきましても言うまでもないことですが、昨年度から著名になっておりますNiziJを輩出したオーディションプロジェクトでございます。この番組の狙いというのは、一般人がオーディションを受けて、さまざまな課題をクリアし、そしてNiziJというものが生まれ、デビュー、その後も彼女たちの努力している姿を見て視聴者が共感するといった、我々の世代からするとASAYANにおけるモーニング娘、あるいは、夕やけニヤンニヤンの「アイドルを探せ」におけるおニヤン子クラブ、あるいは、ちよっと前の世代ですと「スター誕生」などに該当するのかもしれない。いわゆる海外のオーディション番組などによく見られる形態です。

それと同じように研究者の努力をあえて吐露することで、地元の方々に共感を持ってもらいたい。そういった手法をとっております。SNSを通じて研究課題自体を地域住民と共有し、研究の過程自体を提示することで、大字誌の編さんというの、非常に複層的な形で進んでおります。

現在、福島県浜通りでの大字誌の編さんというのは、非常に複層的な形で進んでおります、その分類を最初にさせていただきたいと思います。②③④の部分は先ほどお話しさせていただいたようなポイントに該当します。それとは別に①ですけれども、地域住民が主体的につくった浪江町の赤宇木地区の事例などもございます。そして、西村自身は今試みとして、Nizi Projectのパブリック・ヒストリーというのを展開しているという段階です。これらの試みに関しては、帰還困難区域であったりとか、防災集団移転促進事業の地区、あるいは、復興祈念公園であったりとか、創造的復興とか。また、今回大熊町の事例は出せませんでしたけれども、中間貯蔵施設のために地域が国家権力によって破壊されてしまうと。その地域の歴史をどういうふうに残すのか

というふうな課題を実践しているわけであります。

最後に、この国家権力の主導による創造的復興のために、地域のコミュニティの復興というようになかなか結びついていないという批判があちこちで見受けられます。ただ、近年の例えば双葉町における復興計画を見ますと、復興計画の初発段階から、「双葉町の歴史・伝統・文化の記録と伝承」というのを掲げております。また、大熊町の第二次復興計画などにも、「大熊町のDNAを残し、新しい文化を紡ぐため」、「ふるさとの歴史を伝えるための記録の保管と活用」を重点施策に挙げております。こういった点から考えますと、帰還困難区域などの地域におけるコミュニティの復興には、当該地域の歴史と文化の継承が不可欠だろうと思っていて、まさに今回の地域文化の再構築というところに当たるのかなと思っております。

最後になりますけれども、今回のシンポジウムの副題にも上がっております、この可視化・高度化という点につきましては、僕自身まだまだ十分に考えが及んでいないところもあります。地域にとって可視化・高度化というのをどういうふうにしていくか。今後の課題ですので、今日の中でまた勉強していきたいなというふうに思っております。以上で報告に関しては終わりにしたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

報告2

方言と地域文化―八重山の方言と東北の方言



本部 暢子（国立国語研究所特任教授）

国立国語研究所の本部と申します。私は方言の調査と保存の研究をしています。今日は最初に各地の言語や方言が消滅の危機に瀕しているというお話、次に東日本大震災のときに方言をめぐってどういうことが起きたかということ、そして私がフィールドとしている琉球で過去に起きた大きな地震・津波とそれに伴う方言の話をし、これらを通して方言を守ることが地域文化にとってどういう意味を持つのかについてお話したいと思います。

最初に、東北や琉球のことを始めとして、今、各地の言語が衰退して消滅の危機に瀕していることについてお話しします。言語の消滅は、一九七〇年ごろから深刻に意識されるようになってきました。私はそのような言語を記録し、それだけではなく、生きた形で継承していくという仕事をやっています。しかし、なかなか難しい問題に直面しています。

先ほどの西村先生のお話では、文化財の場合は、地元の方が古いものを残そうという気持ちで非常に強く持っておられます。しかし、言語の場合は、古い方言を残そうという意識がかなり低

い。このあとお話しするように、方言を使うことが禁止されていた時代がありましたから、方言を残そうという意識が低いのも仕方ありませんが、地域の言語の衰退が深刻な状況であるにもかかわらず、保存の意識が低いという状況です。

言語の消滅は日本だけでなく、世界中で起きています。言語の衰退は、その言語を話す人たちの文化や権利の問題と深く関わっています。それらを守るために、国連は二〇〇七年に「先住民族の権利に関する国際連合宣言」を採択しました。これに続いて、ユネスコは二〇〇九年に“Atlas of the World's Languages in Danger”（世界消滅危機言語地図）第三版を発表して、消滅の危機にある言語を守ることを訴えました。スライドにその地図を載せておきました（図1）。この地図には約二五〇〇個のバールンが立っています。一つ一つのバールンが一言語です。したがって、世界で二五〇〇の言語が近々、消滅してしまうという警鐘をユネスコは鳴らしたわけです。

この中に日本の言葉が八つ入っています。アイヌ語、

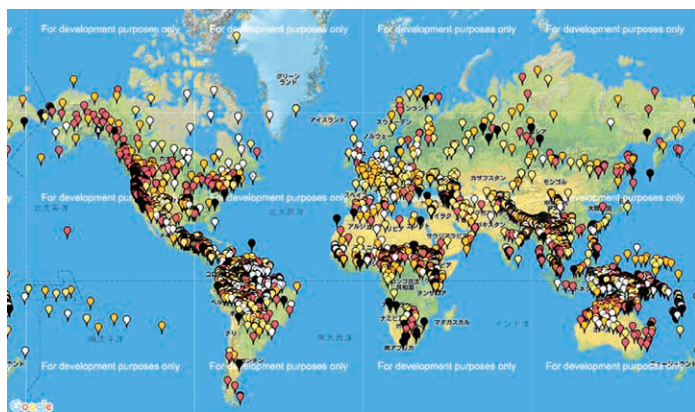


図1 消滅の危機にある言語の分布（“Atlas of the World's Languages in Danger”より）

八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語の八つです。アイヌ語はネイティブスピーカーがほとんどいない状況で、「極めて深刻」な段階と判定されました。それから、東京都の八丈語ですけれども、これまで八丈語は危機言語として注目されたことがありませんでしたので、八丈語が八つのうちの一つに入っていることを意外に思われる方が多いかもしれませんが、八丈語には日本語の古い特徴が残っていることが、日本語研究の分野では以前から指摘されてきました。アイヌ語、八丈語以外の六つの言語は、奄美・沖縄の言葉です。

消滅が危惧されるのはこの八つだけかというと、そうではありません。ユネスコのリストには取り上げられていませんが、日本各地の方言もほとんどが消滅しかけています。大阪弁でさえ危うい状況です。大阪弁の典型的な言葉に「買うてもろうた」「ようけ（たくさん）」「かんにん（ごめんなさい）」「おおきに（ありがとう）」「きょうび（近ごろ）」「けったい（変な）」などがありますが、今の若い人たちはこれらの言葉をほとんど使わないという報告があります。一方、若い人もまだ使っている言葉があります。例えば、「しんどい（疲れる）」とか「しゃあない（仕方がない）」とか「ようせん（できない）」とか。しかし、こういう言葉もいつ消滅してしまうかわからない状況です。ですから、日本で消滅危機言語の議論をするときには、これらの方言を含めて「言語が消えていく」とはどういうことを考えなければいけないと私は思っています。

言語の消滅がどうして起きるかという点、学校教育と社会の変化の二つが深く関係しています。日本における方言の消滅は、実は明治政府の発足と同時に始まっています。明治政府は近代国家として標準語を制定し、それを日本のすみずみまで普及するという政策をとりました。そのため

に、小学校で子供たちに標準語の教育を行いました。その後、世界は戦争の時代に入りますが、戦争の時代には、なお一層、標準語政策が強化され、標準語の使用が推奨されました。

第二次世界大戦後、日本は一時期GHQによって支配されます。このとき日本語をどうするかという議論が行われました。日本語廃止論を唱える人もありました。志賀直哉が日本語を廃止してフランス語にしようと言った話は有名です。GHQによる日本人の読み書き能力調査（一九四八）も行われましたが、幸いなことに日本語を維持する形で戦後の教育が行われました。しかし、方言に関しては、戦前と同じように、使用しないようにという政策が継続されました。学校教育に関しては、文部省（二〇〇一年からは文部科学省）が学習指導要領を出して、学校教育課程の基準を示しています。一九五一年の学習指導要領「国語」小学校四年生では「方言を使わないで話しましょう」ということが目標として掲げられ、これが一九七〇年まで国語教育の骨子となっています。

それに拍車をかけたのが、社会の急速な変化です。日本は戦後、敗戦からの復興を急速に成し遂げました。敗戦から十一年たった一九五六年の経済白書には「もはや戦後ではない」と書かれ、一九六〇年から一九七〇年代は高度経済成長期になりました。人がどんどん都会へ移動し、同時にテレビや家電製品が全国に普及しました。そして、一九六四年に東京オリンピックが、一九七〇年に大阪万博が開催され、たくさんの外国人が日本に来るようになりました。

このような時代に学校教育を受けた人たちは、「方言を使つてはいけない」「共通語を使いなさい（戦後、標準語は共通語と言い換えられました）」「方言は汚い」と言われ続け、地域によって

は、方言を使うと「方言札」を罰として首からかけさせられるということもありました。ですから、この世代の人たちは、方言は「汚いもの」「使ってはいけないもの」という意識を強く持つようになったのです。

方言の考え方が少し変わってくるのが一九七〇年のころです。一九七一年の学習指導要領「国語」小学校四年生では、「共通語と方言では違いがあるということを理解しましょう」というように、ちよつとトーンダウンしています。しかし、やはり「共通語を使いましょう」という基本理念は変わりません。

言語は三代で入れ替わります(図2)。このときキーを握っているのが第二世代の人たちです。例えば、共通語がまだ完全には普及していない時代には、親の世代(第一世代)は方言で子育てを行います。したがって、この時期に幼少期を過ごした第二世代の頭の中には、方言がインプットされています。しかし、第二世代の人たちは、方言は「使ってはいい」と教えられましたので、自分が親になったときに、自分の子供(第三世代)に方言を伝えようとはしません。そうす

言語は三代で入れ替わる

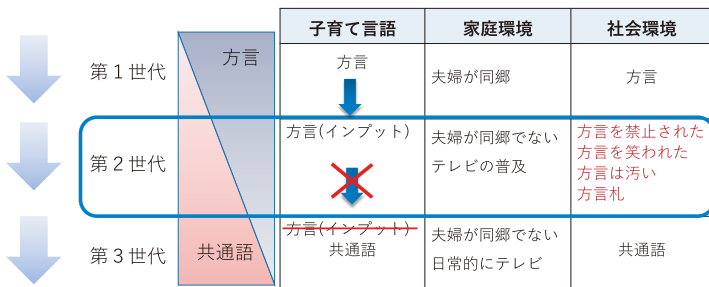


図2 三世代にわたる言語の消滅過程

ると、第三世代の頭の中には方言がインプットされません。こうして、言語が消滅していくのです。

方言の消滅には、社会の変化も大きく関係しています。先に述べたように、第二世代には人の移動が盛んになります。それまではずっと地元にて、同郷の人同士が結婚するのが普通でした。夫婦が話す言葉も地元の方言でした。しかし、高度経済成長期になって人の移動が盛んになると、同郷の人同士の結婚が激減します。そうすると、夫婦が同じ方言で会話することがなくなり、子供が家庭で方言を学ぶこともなくなります。その一方で、テレビの普及により、テレビから共通語が日々流れ、子供は方言よりも共通語を先に覚えるという状況になってきました。

第二世代の人たちは、このような環境で育っていますので、「方言はなくなってもいい」「共通語があればいい」と考える人が多いのです。むしろ、方言を学んでいない第三世代の人たちの方が方言を面白がって使用することが増えています。

方言は自分たちのアイデンティティーの象徴だから、方言を守りたいという意見もあります。しかし、では、具体的に方言を守るためにどのような活動をすればいいかがよくわからなくて、結局、行動を起こさずに方言消滅容認派になってしまいう人がほとんどです。

このような中で、私たちは各地の言語や方言を守ろうという活動をしています。なぜ言語や方言を守らなければならないかというと、国連の宣言からも分かるように、言語はそれを使う人の文化や権利と強く連動しているからです。その他にも、言語というのは、いったん消滅すると復元するのが大変難しいという理由もあります。ある特別な技能をもつ一人の人が言語をマスターすれば、言語が復活したことになるかというと、そうではない。それを使ってコミュニケーション

ンができなければ言語が復活したことはありません。たくさんの方がその言語をマスターしないといけないわけです。したがって、言語は一度途絶えてしまうと復元するのが大変難しいのです。そのような言語を私たちの代で消滅させてもいいのか、言語や方言を守るのも消滅させるのも、私たちの責任であるということを自覚したいと思うのです。

ただ、東日本大震災のときは、ちょっと困ったことが起きました。震災後に復興ボランティアとして東北に入った方から「東北方言がわからない」という意見が出されました。また、東北の方から「ボランティアの人の言葉に親しみが持てない」という意見が出されました。方言が人と人を隔てる障壁になってしまったのです。これを聞いたとき、私はずいぶん悩みました。方言を守ることが本当に地域の人の幸せにつながるのだろうか。

しかし、その後すぐに、「がんばっぺし」「けっっぱれ」のような東北方言のスローガンが掲げられるようになりました。これにより、東北の人たちの心が一つになり、



図3 方言エール（左：各方言、右：東北）三省堂辞書ウェブ編集部ことばの壺第236および第231回筆者：田中宜廣
(<https://dictionary.sanseido-publ.co.jp/column>)

方言が地域復興の支えになったのです。言葉は地域の人たちの団結力を強める力をもっているのです。

しかし、それだけではありません。東日本大震災のときには、全国から各地の方言でエールが寄せられました(図3)。例えば、「ちばりよー、東北」「わいどー東北」「頑張ってやー東北」など。「ちばりよー」は沖縄の方言で、「頑張って」という意味、「わいどー」は奄美の方言で、勢いをつけるときのかけ声、「頑張ってや」は大阪の四條畷^{じょうなわて}の方言です。このように各地の方言でエールが送られたことに、私は心を打たれました。本来、「ちばりよー」は沖縄の人が沖縄の人にかける言葉です。「がんばっぺし」が東北の人たちの団結力を強めたように、「ちばりよー」は沖縄の人たちの団結力を強めます。普通なら東北の人に向かって発することのない言葉を沖縄の人が東北の人にかけたということは、沖縄の人が東北の人を自分たちの仲間として応援しようとしていることをあらわしています。「わいどー」「頑張ってや」も同じです。方言が、地域の違いを超えて人と人を結びつけるということを、

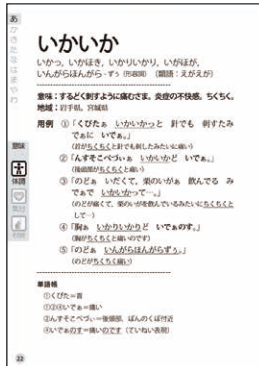


図4 国立国語研究所刊行の『東北方言オノマトペ用例集』
(<https://www.ninjal.ac.jp/publication/catalogue/onomatopoeia/>)

私は初めて経験しました。

ところで、東日本大震災のときに国立国語研究所は、『東北方言オノマトペ用例集』を作りました(図4)。東北方言は、オノマトペ(擬音語・擬態語)がとても多い方言で、これが体の痛みをあらわすときによく使われます。共通語でも「きりきり痛む」とか言いますが、東北には特有のオノマトペがあります。スライドに挙げた「いかいか」というのは、東北以外の地域の出身者には理解が難しいですけども、「鋭く刺すような痛み」をあらわします。また、「ぎやぎや」もやっぱり鋭く痛むさまをあらわします。東北にはこういう言葉が多くあって、他地域出身の医者さんが診療するときなどは、困ることもあったようです。それで、医療関係者と患者さんのコミュニケーションの手助けができないかということで、今村かほるさん(弘前学院大学)の呼びかけに応えて、当時の国立国語研究所プロジェクト非常勤研究員の竹田晃子が主体となって作成したものです。この用例集が診察の役に立つと同時に、地域の方と医療関係者のコミュニケーションのきっかけになればと思います。

次に、岩手県の大船渡市の山浦玄嗣さんという方の書かれた文章を引用します。大船渡市は昔の気仙郡に属し、山浦さんはケセン語の記録やケセン語の劇を上演したりして、方言復興に非常に熱心に取り組んでおられる方です。震災の後、山浦さんに震災のことを語っていただきました。これはその講演の一部です。最初の部分は、津波で近所の人々が流されて来たときの話です。「お前さまアこんななどゴで何イしてましたれ?」「いやあ、俺も好ギでこんななゴドオしてるわゲでアねアんだでば!」ケセンの人の会話はユーモアたっぷりです。山浦さんはお医者さんですの

で、震災後患者さんたちが山浦さんの病院にやって来ます。そして「先生、これア戦（いぐさ）だがらね。負ゲるわげにアイガねアんだがらね」と言つて頑張っている。方言で震災を語ることが地域復興の力になるのではないかと思います。文化庁でも「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究」という事業を立ち上げ、各大学が方言による震災の記録を作成しています。

最後に、私たちがふだんフィールドワークをしている沖縄のことをお話しします。沖縄県の宮古・八重山地方では、明和八年（一七七一年）、今から二五〇年ぐらい前に大きな地震が起き、津波で大きな被害を受けました。特に石垣島の南海岸の白保^{しらほ}と宮良^{みやら}では、九八・二％、八五・九％の人が亡くなったと言われています（図5）。その後、白保には波照間島^{はてるまじま}から、宮良には小浜島^{こはまじま}から人が移住して復興に当たりました。津波から二五〇年たっていますけれども、いまだに白保や宮良の方言には、移住元の波照間島や小浜島の方言の特徴が見られます。こういうものを今、守っていかなければ、方言の消滅と同時に地震や津波の記憶も消

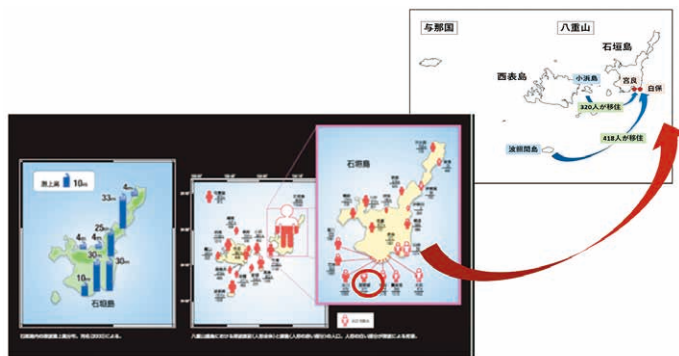


図5 明和の大津波による被害（琉球大学地震学研究室<http://seis.sci.u-ryukyu.ac.jp/hazard/EQ/1771yaeyama/population.htm> による）

えてしまう。そう思って、方言を残す活動をしています。そのために何をやっているかというと、方言辞典を作って、できるだけたくさんの方言を地元の人と一緒に記録するとか、また、これは国語研の山田真寛さんが主体となってやっていることですが、方言の絵本をつくって子供たちに読み聞かせをしています（図6）。先にも言いましたように、方言を継承するためには、子供たち（第三世代）に方言を伝えることがとても大事です。そのために、地域のひとを巻き込んで、子供たちに方言に興味をもってもらうという活動が必要だと考えています。

それともう一つ、今回のシンポジウムのテーマの一つでもある、展示を通した活動をやっています（図7）。国立国語研究所は展示施設を持っていません。それで、モバイル型の展示ユニットを歴博と共同でつくり、各地に持って行って、各地で方言の展示を開いて、そこで地域の人に方言を残す活動に参加してもらおうということをやっています。方言を守るのも消滅させるのも私たち次第です。今日、私の話を聞いてこのような活動に賛同してくださる方は、ぜひ、ご自分の地域の言葉を子供たちに伝えてください。

以上です。どうもありがとうございました。



図7 奄美大島における展示（2020年）



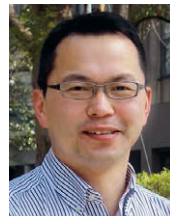
図6 方言の絵本

参考文献

- ・石坂文「大阪弁と標準語における方言意識」『近畿大学日本語・日本文学』一一（二〇〇九年）
- ・井谷泰彦『沖縄の方言札さまよえる沖縄の言葉をめぐる論考』ポードアインク（二〇〇六年）
- ・木部暢子編『災害に学ぶ』勉強出版（二〇一五年）
- ・経済企画庁編「国民生活白書 豊かな交流人と人のふれあいの再発見」（一九九三年）
- ・経済企画庁編『昭和三十一年年次経済報告』（一九五六年）
(<https://www5.cao.go.jp/keizai3/keizaiwp/wp-je56/wp-je56-010301.html>. 2021.06.25)
- ・真田信治『方言は絶滅するのか』PHP新書一七九（二〇〇一年）
- ・文化庁「東日本大震災において危機的な状況が危惧される方言の実態に関する調査研究」
(https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kokugo_shisaku/kikigengo/shinsai_jittachosa/index.html. 2021.06.25)
- ・文部科学省「昭和五五年版科学技術白書」(https://warp.dandl.go.jp/infondjp/pid/286794/www.next.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpaal98001/index.html. 2021.06.25)
- ・読み書き能力調査委員会『日本人の読み書き能力』東京大学出版部（一九五一年）
- ・UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger (<http://www.unesco.org/languages-atlas/index.php>. 2021.06.25)

報告3

環境と地域文化―滋賀県比良山麓の恵みと災い



吉田 丈人（総合地球環境学研究所・
東京大学大学院総合文化研究科 准教授）

「環境と地域文化―滋賀県比良山麓^{ひらさん}の恵みと災い―」というタイトルで今日はお話しさせていただきます。私は総合地球環境学研究所というところにいまして、人間文化研究機構の一つの機関です。私の専門分野は、生態学とか陸水学と呼ばれる自然環境に関する研究分野です。人と自然のかかわりは、生態学でも大事な研究テーマになっていまして、多くの共同研究者の皆さんと一緒に研究していることを、今日はお話しさせていただきます。と思います。

ここでお話しするのは滋賀県比良山麓の事例ですが、今回の特別展の一部となっています。もしかしたらもう既に展示を見られた方については、おさらいのようなことかもしれませんし、まだ見ていない方については、ぜひ図録などの形で、見ていただけたらと思っています。

自然環境は、自然の恵みと言われる多くの恵みを私たちにもたらしてくれと同時に、いろんな災害、災いというものももたらします。こういう恵みと災いの両方に対して、地域の人たちが

これまで長い間つき合ってきました。特に日本は、そういう災いも恵みも両方たくさんあるというか、恵みも豊かだけれど災いもかなりあるという場所です。そういう中で、地域の人たちはそれぞれ歴史を受け継いできました。自然とつき合うすべなど、豊かな知識が長い時間をかけて、それぞれの地域で育ってきて、それが地域の文化として認識されているところだと思います。

滋賀県に琵琶湖という大きな湖がありますけれども、その西側に広がっている比良山麓に焦点を当てて、この自然の恵みと災いのかかわりと、これにかかわる地域文化についてお話をさせていただきます。この写真を見ていただくと、琵琶湖が東側にあり、その西側に比良山地という山があります。比良山地はかなり急峻で、標高一〇〇〇メートルを超える山々ですが、琵琶湖からの水平的な距離はわずか四キロメートルくらいしかなく、東側の斜面が急激に下って琵琶湖に達するという地形をしています。この比良山地から幾筋も川が流れていまして、山を削って、石や砂がたくさん山から麓のほうに運ばれていきます。それで、扇状地と呼ばれるような地形をつくります。そういう扇状地をつくって、さらに土砂を川が流して、最終的には琵琶湖のほとりに山から運ばれてきた砂がたまって、内湖と呼ばれるような地形であるとか、美しい砂浜が広がる景観がつくられます。

図1を見ていただくとわかるように、こうやって山はどんどん崩れています。特に大雨が降ると、土石流や崖崩れが起きて、土砂災害が起きることが、この地域でも古くから知られています。近世には、扇状地を流れ下る川が大きく流路を変えて、集落の家や田畑を流してしまったりとか、土石流に運ばれた石や砂によって、荒れ地が広がったという記録が、地域の古文書から出てきま

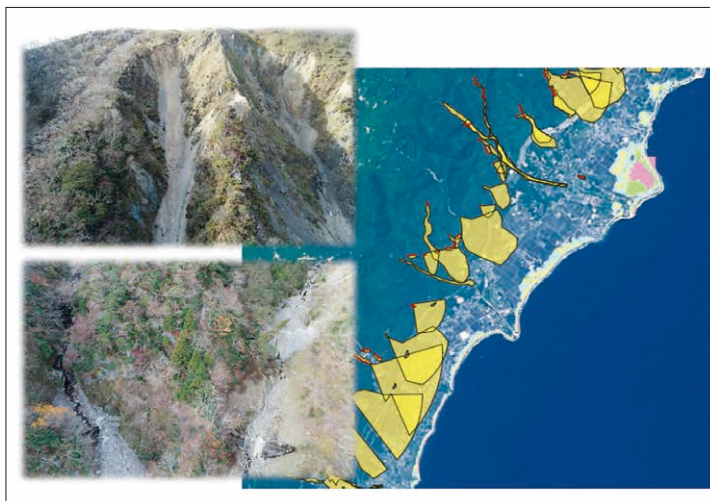


図1 比良山地の地形と土砂災害リスク
(撮影：二宮健斗氏、鬼塚健一郎氏、滋賀県防災情報マップ)

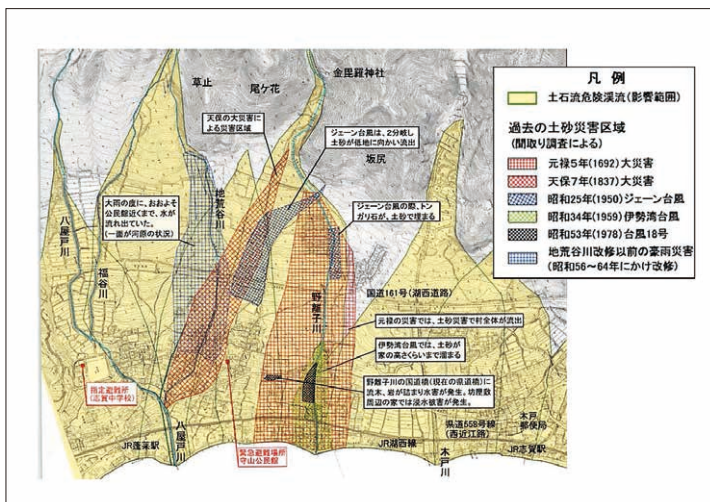


図2 比良山麓における土砂災害の歴史（大津市守山自治会防災行動指針）

す。また、山が大規模に崩れ落ちて、集落全体を土砂に埋めたこともあったことが記録されています（図2）。

こういう幾度もの厳しい自然災害、土砂災害を経験する中から、土砂災害を避けるように集落の立地が工夫されてきました。江戸時代前期から中期に描かれたと言われている古絵図が地域に残っています（図3）。これを見ると、下側が琵琶湖で上側が山ですけども、人々はその山と琵琶湖に挟まれた扇状地下部から湖岸にかけての狭い範囲に集落を築いて、古くから住んできたというのがわかります。

集落の周辺には田畑があつたり、あるいは草場があつて草を取ったりしたことや、村の明細帳の古文書からは、米などの穀物や野菜をつくってきたことがわかります。山の恵みと湖の恵みも利用してきたことが見えます。自然がもたらす多様な恵みに支えられていて、この集落



図3 古地図にみる集落地の立地（守山財産区蔵）

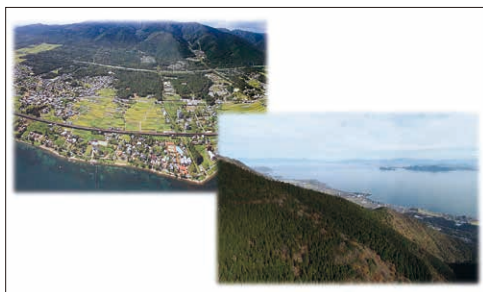


図4 現在の集落の立地と、暮らしを支えてきた比良山地と琵琶湖（撮影：二宮健斗氏、鬼塚健一郎氏、提供：松井公明氏）



図5 比良山地の恵みである石の文化と産業①（撮影：井本伸廣氏、島内梨佐氏、吉田丈人）



図6 比良山地の恵みである石の文化と産業②（撮影：千田昌子氏、吉田丈人）

に住んでいる人々の生活が成り立ってきたのです。

この集落の景観は今でも残っています。図4左側の写真はドローンで撮った写真で、右側の写真もドローンですが、山の上から撮った写真です。眼下にとっても美しい景観が広がっていますが、これは琵琶湖です。比良山地から琵琶湖に広がる景観の中で、自然の恵みを巧みに利用しながら災いを避けるという地域の暮らしが、今なおつながってきていることがわかります。

土石流や崖崩れは土砂災害をもたらす一方で、山から石を運び出す力にもなっています。比良

山地をつくっている石は何かというと、地下深くで冷えて固まった花崗岩であったりとか、チャートと呼ばれる太平洋の深い海底でつくられた堆積岩が、プレートに乗ってどんどん日本のほうまで運ばれて今は比良山地にあるという、こういう種類の石が出てきます。そういう石が石材として利用されて、石の文化であるとか産業がこの比良山麓に育まれてきました。

図5左側の写真は美しい縞模様が見えていますけれども、これがチャートで、京都の庭園に運ばれて庭石として使われていたりします。それから、比較的加工のしやすい花崗岩ですね。石なのにやわらかいと言うとわかりにくいですが、加工がしやすい石材として花崗岩がつかわれて、例えば非常に精巧な石灯籠だったり、それから、この地域の神社にはとても大きな狛犬が奉納されていたり、こういうものがつくられてきました。

地域の中を見渡してみますと、こういう石材がいろんなところに使われていて、お寺のお堂に一〇メートルぐらいあるとても尺の長い石がありますが、これは切れ目がなくて一本のこういうものが大きな石から切り取られています。非常に高度な技術があったということです。集落のご自宅にも庭石としてチャートが使われています。また、今のような機械で削るのではなくて、のみを使って手で彫っているの、とても美しい曲線がある灯籠も見られます。これは土台ですけど、これもとても美しい曲線が見られますが、全部のみをつかって手で作られてきたそうです。こういうものが地域にたくさん残されています。石を使った産業、石を使った文化というのが、地域の中に根づいているのがわかります。

同じ花崗岩が風化して細かくなってくと、いわゆる真砂まさと呼ばれる白い砂になるわけですが、

それが琵琶湖の湖岸まで運ばれて、白砂青松の白い砂浜と松林がある景観をつくっていて、夏には湖水浴の観光客がたくさん訪れるような場所にもなっています（図6）。

石は、地元の石工さんたちによって大きな石が山で切り出されて、荷車を使って運ばれて、地域で石臼であったり、先ほどの狛犬などいろんなものに加工されたり、一部は地域の神社に奉納されたりしています。それから、石はこの地域で使われるだけではなく、丸子船という琵琶湖を行き交っていた船に乘せて、湖東の地域だとか、京都方面に出されていく産業が成り立っていたということです（図7）。これらの絵は、写真では残っていないので、地域の人たちに聞き取りしながら、絵としてまとめたものです。この資料も、地球研のウェブサイトから見ていただけるようになっていきます。

暮らしへの石の利用は地域のいろんな場所に見られます。先ほどお見せしたものだけでなく、自然災害から集落や暮らしを守るためにも、たくさん使われています。古絵図にその様子が描かれています（図8）。この左側は百間堤ひゃくけんづつみと呼ばれる堤で、一八五二年に描かれた絵図には既にこういう大型の石積み堤があったことが見られます。こちらの絵図には、この集落の上のところに薄い線が見えますけども、これはシシ垣と呼ばれる石積みの構造物があったことが見てとれます。この周囲のシシ垣は、石が積んであって、イノシシとか鹿が山からおりてきて、獣害を引き起こすを防ぐためにも使われるのですけども、それだけではなく、とても堅牢なつくりになっていますので、山から下りてくる土石流の被害を避けることにも役立っていたのではないかと言われています。

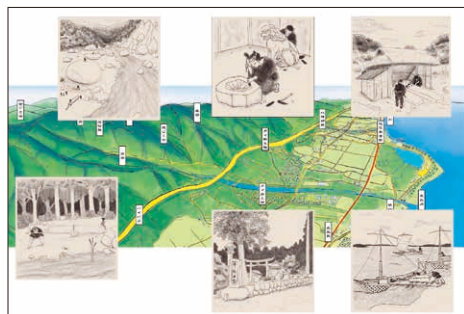


図7 石工の仕事（比良山麓石工鳥瞰図
（総合地球環境学研究所 2019））

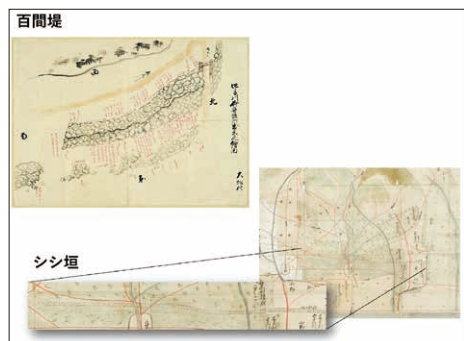


図8 古絵図にみる災害対応（大物共有財産管理組
合蔵・大津市歴史博物館提供、守山財産区蔵）



図9 今も現役の減災インフラ（撮影：島内梨佐氏、
中井美波氏、二宮健斗氏、吉田丈人）

このいわゆる減災インフラともいえる石積みインフラは、今でも現役で活躍しています（図9）。これが百間堤をドローンで撮影した写真ですが、ここにドローンを操作している人がいます。人と同じかそれよりも大きな石が、どういうふうに残りだか今ではよくわからないようなぐらいの大きな構造物が地域に残されています。これは先ほど絵図でお見せしたシシ垣の一部です。非常に堅牢なつくりの石垣がめぐらされているのがわかります。

百間堤やシシ垣のほかにも、川からあふれ出した土石流を二重三重の堤防で集落に行くのを防



図10 地域文化の学びの場（特別展パネルより）

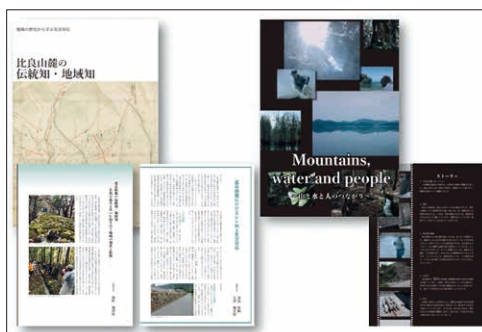


図11 地域文化の伝承（冊子：比良山麓の伝統知・地域知（2019）、映画：山と水と人のつながり（2020））



図12 地域での学びと実践（守山自治会防災活動）

くような堤防群が残されています。琵琶湖に行くと、波除け石と言われるような、これは天気の良い波が穏やかなときに撮った写真ですが、琵琶湖はとても大きな湖なので、風が吹くと大きな波が来るわけですけど、その波の勢いをいなすために使われています。

山から里へ、里から湖へと広がる景観の中で、自然の災いである土砂災害を避けながら、自然の恵みである石をうまく利用する。そういう地域の人々の暮らしが脈々と営まれてきたのです。先ほどお見せしたような石の文化が地域の中にたくさん見られます。そこに、この地域の文化を

学ぶ、学びの場が用意されていると言ってもいいかと思います。このパネル（図10）は、今回の特別展のモバイルミュージアムで展示していただいているものと全く同じものですが、こういう地図上に表すと何がどこにあるかがよくわかりますので、こういう地図を見ながら、一度地域をめぐってみるというのも、一つの学びの機会かなと思います。

今日お話しした地域の文化を伝承していくために、いろいろな取り組みを私たちもしています。一つが、『比良山麓の伝統知・地域知』という冊子で、今日お話しした内容はほとんどその中にまとめられています。それから、映像として見ていただくために映画もつくっています。どちらも地球研のウェブサイトから無料でご覧いただけますので、ぜひ見ていただければと思います（図11）。

この冊子の目次を見ていただくと、自然環境から地域の暮らし、石の文化、先ほどお話しした災害対応まで幅広い内容があります。伝統知・地域知を活かした、EcoDRR (Ecosystem-based Disaster Risk Reduction) という、生態系を活用した防災・減災について紹介しています。今日お話しした内容をより深く理解していただくには、こうした冊子も見ていただければありがたいと思っています。今日お話しした内容は、たくさんの方々との共同研究の成果でもあります。地域で学ばせてもらった文化を、地域の多くの皆さんと一緒に学んで学べる機会をつくったり、子供たちに参加してもらって次世代に地域の文化を継承していくというような取り組みも進めています（図12）。

今日はごく簡単にお話しさせていただきましたが、まとめますと、いま気候変動が進んでいて、

社会や経済のあり方が大きく変化してきた中で、自然がもたらす災い、自然災害にどうやって向き合っていくのかというのは、とても大事になっています。これは、大きな災害からの復旧復興という視点だけではなくて、これから来る災害に対してどのように備えていくか、事前復興という言い方もされますけども、その面でも、地域文化はとても大事だと思います。

自然災害への対応を考えると、自然がもたらす恵みも災いも両方がある、その両方がかわりあっているという理解が大事になってきます。自然とのかかわりが、今日お話ししたような地域文化をつくってきたのですし、逆に、自然を活かして災いを避ける暮らしを地域文化が支えてきたという言い方もできると思います。

しかし、先ほど方言の話でもありましたけども、現代の新しい技術が発展していく中で、こういう地域文化がますます忘れ去られようとしています。地域文化を次世代にどう伝えていくのか、また、新たな時代にこの地域文化をどう発展させていくのか、地域社会の未来の可能性にとって重要になっていると感じています。ありがとうございました。

報告4

映像のなかの地域文化

―石川県輪島市皆月のくらしと祭り

川村 清志（国立歴史民俗博物館 准教授）

国立歴史民俗博物館の川村です。私からは「映像のなかの地域文化―石川県輪島市皆月のくらしと祭り」と題して発表させていただきます。

以下ではタイトルにあるように、映像を通して地域文化を記録していく意味を問い直したいと考えています。映像を通じて地域文化について考えるとともに、映像で文化を記録することは、どういう意味を持つのかを検討することで、本テーマの可視化・高度化という、文化を「見える化」したり、さらには見える化によって地域文化の表象のあり方を「高度化」していくことの意味について考えていきたいと思います。

この発表では、地域文化の記録映像を撮る意味として三点ほど、提案させていただきます。まず一つは、文化の継承と検証のための記録映像です。やはり何といっても情報量の多いメディア、再現度の高いメディアとしての映像記録の特性を活用して、それを研究資料として用いたり、多



様な分析の可能性を持つものと考えていきます。

二番目に、広報・普及のツールとしての映像があります。我々が今回、行ったモバイル展示のようなものも含めた、研究と地続きの応用的活用という意義と捉えられます。これは現在行われている、一残念ながらコロナ禍のために休館中ではありますが、民博（国立民族学博物館）での展示実践にあるような形で、地域文化を他地域の人たちに広く知っていただくための教育、展示資料としての活用の可能性、さらにもう一步進んで、特定地域の文化を他地域の人たち、あるいは他の文化圏に属するような人たちが応用的に使う、例えばアーティストたちが自分たちの作品などに活用していくような時にも、こういった記録映像というものが有り得るだろうと思っています。

さらに三番目に、現在進行中の文化実践への寄与として、地域へのエンパワーメントという側面があります。地域社会に記録映像を還元することで、被調査者であった人たちとの関係性をさらに構築していく。目指すべき

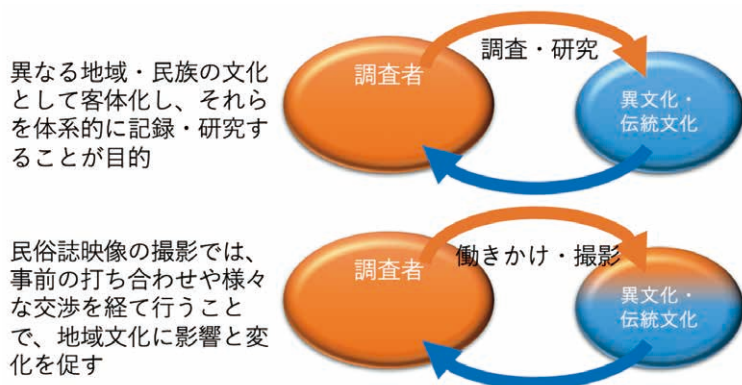


図1 フィールドワークと映像撮影の差異と共通点

は、地域社会とともに各々の文化を記録し、新たに活用していける場を創っていくことだと思います。

図1は、従来の民俗学や文化人類学における現地調査のモデル（上部）と、映像による記録化のモデルとの違い（下部）を図式化したものです。民俗学、人類学のフィールドワークでは、調査者が異文化や伝統文化を訪れて、その文化を客体化した形で取り上げるといふ図式が一般的でありました。つまり調査の現場で研究者は、透明人間のような存在で、現地には何の影響も及ぼさないと捉えられていました。正直申し上げて研究者の間には、今もこういう立場に安住している方が多いようです。

対して記録映像を撮る場合には、地域との撮影の承諾、依頼や、撮影に際してのさまざまな働きかけ、あるいは地域内での個別の交渉が不可避です。その意味で、地域に対して研究者や調査者が非常に大きな影響を与えることがあります。場合によっては地域文化に対しての不可逆的な変化を与えるのがこちらのモデルですが、実際にはこのような事態は、あらゆるフィールドワークの場で起き得ることです。

このような調査者と現地との関係について、これまでの研究は真正面から向かいあってきたものでした。むしろ記録映像を撮る作業を含み込んだ現地調査の実践の中で、そういった問題を反省的に捉えていきたいと思います。

今回、民博でのモバイル展示に携わったときに、私が出発点としたのが、二〇一四（平成二六）年から二〇一六年にかけて撮った、石川県輪島市門前町^{もんぜん}皆月の山王祭という夏祭りの記録映像で

資料番号	テーマ	時間	地域内外
1	皆月の記念日の村の様子、冬の日吉神社、子供達の海水浴	8,25	内
2	七浦尋常小学校運動会	8,27	内
3	海岸での漁仕事	3,46	内
4	川辺の花見（七浦以外、場所不明）	4,25	外
5	曾々木方面散策、白米千枚田	2,34	内、外
6	順通丸進水式、餅まき	2,10	内
7	網直し、家の様子、子供達の遊び他	2,33	内
8	皆月日吉社山王祭	4,22	内
9	子供達の海水浴	1,50	内
10	海岸部の様子	2,32	内
11	皆月日吉社山王祭浜の渡御	2,02	内
12	金沢ネオンの様子	2,10	外
13	神棚のようなものを担ぐ人たち（恵比寿社の祭りか？）	2,29	内
14	水面、金魚	1,01	内
15	海岸での漁の様子、海水浴	2,32	内
16	街場の様子、能登七尾線の車窓の風景	2,40	外
17	タイトル不明（金沢市内、金沢駅からの車窓の風景）	5,12	外

表1 ショウゴロウフィルム現地撮影分一覧

す。こちらは今申し上げたような形で、これまで調査をしてきた皆月という村の夏祭りの記録を主な目的として実施しました。ただし、今日、お話しする内容は、夏祭りの映像自体ではありません。映像撮影の過程で地元の方から、うちにこういうフィルムがあったよと、記憶を呼び起こしていただき、古い16ミリフィルムを貸与してもらったという出来事がありました。まずこの過去のフィルムについてご覧いただきたいと思います。

その16ミリフィルムは、残されていた家の屋号の名前から、ショウゴロウフィルムと呼んでいます。フィルムの中には、撮影されたフィルム以外にニュース番組や、海外から輸入された既製品も含まれていました。地元の方が撮影したと考えられるフィルムは、現在十七本確認されています（表1）。撮影された年代は、戦前から昭和三十年代初頭にか



図2 山王祭の神輿のシーン



図3 砂浜にとめられた曳山



図4 船の出初式で行われた餅まき

とと考えられています。時期がほぼ特定できるものとして、尋常二年という文字が記されている——ということは戦前、恐らく一九三〇年代の後半ぐらいの撮影と思われる——運動会の映像や、輪島市白米しらよねの千枚田が出てくる場面に特別史跡と記された看板が映り込んでいる——指定は戦後の一九五四（昭和二九年）——の映像などを確認することができました。そういったやや時間的な幅がある資料ですけれども、八〇年以上前の皆月とその周辺部の風景が、この16ミリフィルムの中に残されているわけです。フィルムの中にはどうやら撮影者が滞在していたであろう、金沢市内の

ネオン街やその近郊の河川敷の風景とおぼしきフィルムもありました。

いくつか、動画から切り抜いた画像をご覧くださいませう。まず図2が、この地域の夏祭りの神輿の行列です。後ろのほうに神輿がありますが、動画によつて、当時の神輿の行列の衣服や随行している人たちの陣容が、現在とはかなり異なることがわかります。また、この当時、行列の人たちの多くが、帽子をかぶっていることも見てとれます。これは大正期から昭和初期に流行したカンカン帽という麦わら帽子の一種だと思われます。夏期の日差し避けのために、当時は正装として帽子をかぶることが意識されていたのでしょうか。しかし、袴姿かみしもの男性までこの帽子をかぶっているのは、今日では見られない景色です。

図3は、先ほどと同じ山王祭の様子です。海岸の砂浜に曳山が止められ、御飯屋という、神輿が夜籠りをする仮設の小屋が建てられています。現在、海岸部は、完全に埋め立てられて道路になつていますので、砂浜で行われていた実際の様子がわかる貴重な資料になります。

他にもフィルムの中には地域を映し出した動画があります。図4も、そこから切り取った画像ですが、男性たちが船の上で何かをしている様子が映し出されています。シヨウゴロウさんの家は、もともとはイワシの刺し網漁の親方の家でした。フィルムには、漁に使われる船の出初め式で餅をまいている様子が残っていました。

現在、私は動画から画像を切り抜いて、近年の村の姿と比較する形で記録する作業を地元の有志とともに行っています。このような形で残していくと、地域の変化や景観の変容を捉えることができます。図5は、少し手前の木に隠れてわかりにくいのですが、数件の家が立っているの

す。それが当時の画像で見るとまだ家が建っていない様子が映されています（図6）。ここからも年代などをもう少し特定できそうですと思っています。

こういう形でできるだけ多くの画像を切り抜いて並べていき、村の各所の画像と現在の様子を比較する分析も行っていきたいと考えています。

この最初の事例では、撮影に伴って映像資料を収集し、それをデジタル化する作業を行いました。年中行事の記録映像から客体化された形での資料を地元の方からいただいたわけです。その中には先ほど申し上げた八〇年以上の昔の村の様子、あるいはその当時の人たちのレジャーや行楽の習慣が類推できるような映像も出てきました。場合によってはそれらの映像から切り取った画像によって、家並みの変遷や海岸部の変化、あるいは広場や共同の利用スペース—例えば水端^{みずばた}という共同の水場など—の配置と移動もわかってくるのではないかと考えています。

さて、もう一つのテーマですが、皆月日吉神社の春祭りの再開の試みを、モバイル展示のコーナーの一つとして紹介しています。最初に取り上げた山王祭が八月に行われる夏祭りであるのに対し



図6 百成方面の風景



図5 百成方面の風景（現在）

て、春祭りは文字通り、春に行われるやや規模の小さいお祭りです。かつては四月二日、三日、現在は四月最初の土日に行われています。曳山は出ないのですが、神輿の行列に大太鼓が加わり、村の中を巡行するお祭りでした。

しかし過疎化・高齢化が進んで、二〇〇七（平成一九）年から神輿の行列が休止になります。祭りの休止自体はその年の大寄合―正月に行われる村全体の運営に関わる集会―で決まっています。ただそれに加えて三月に起きた能登半島地震による被害が追い討ちをかけます。神社の境内も大きな被害をうけ、図7のように倒壊した鳥居を立て直すことになりました。こうした被害のため、たとえこの年、例年通りに祭りを行う予定だったとしても、休止を余儀なくされたことでしょう。その後十年以上、春祭りには神輿が出ない時期が続くことになります。

二〇一六年頃から、地元の青年会員、特に地元在住の青年会員たちが春祭りを復活させたいという声を上げました。しかし、実際に復活に至るまでの道のりは、平坦なものではありませんでした。その年、二〇一六（平成二八）年にお願いが始まったのですが、その時点では村方から神輿の復活は否決されます。過疎化で



図8 2017年春の宵祭にキリコを引く
(撮影 伏見温子)



図7 地震後に再建されつつある鳥居の様子
(撮影 島本昭次)

人手が少なくなる一方なので、できるだけ省力化をはかってきたのに、それに逆行する提案として受け取られたようです。

二〇一七年も否決されたのですが、青年会員たちはできることをやっていくことに決めて、自分たちが中学生の頃に扱っていた小型のキリコや大太鼓に飾りつけを行って、村をめぐることになりました(図8)。ようやく二〇一八年、つまり三年目の大寄合で青年会が主体となって神輿を出すことが承認されます。青年会以外にも太鼓の保存会員らの村方の有志も加わって、神輿行列の復活が実現しました(図9)。

私はこの経緯を四つのモニターを使ったモバイル展示で紹介しました。二〇一六、二〇一七、二〇一八年とそれぞれの活動の様子をモニターごとに紹介しました。各々のモニターについては、同じ時間に区切って再現・編集を行いました。それに加えて第四のモニターでは、青年会の役員たちが当時を振り返って語ってくれたインタビュー—こちらだけ音声を残す形式—で紹介する展示を行っております。二〇一七年に関しては、私自身が撮った映像ではなく、地元の青年会員やその奥さんに当たる有志の画像を編集させていただいて創っています。



図10 棟上げ式の餅まき(撮影 小谷奉之)



図9 2018年の春祭りの一行
(撮影 六郎木晴佳)

そういうわけで、今回のモバイル展示は、変化しつつある地域の文化、―これは研究者が入ったことによる変化であるとともに、近代化であったり、残念ながら過疎化・高齢化というものも含めてですが―、そういう変化しつつある地域文化の表象として映像作品を創りたいという意図がありました。同時に地域との協働作業として映像を制作していくことが、私の一つのテーマとなりつつあります。

こういった作業は現在も進行中であって、私自身が撮った映像ではないものをいくつか、取りあげておきます。時間があまりございませんので、後ほど余裕があればご紹介したいと思いますが、例えば図10は二〇一九年に現在の青年会会長がUターンして皆月に戻った際の新宅の棟上げ式で、お餅をまいている様子です。これはアイフォンによる4Kの動画から私がキャプチャーしたものです。元の動画は、地元元青年会会員で、現会長の実兄に当たる方が撮影してくれたものです。また、図11は先日、日高先生の主催で行われた民博の映像上映会に際して紹介させていただいた映像からの切り抜きです。コロナ禍における村の様子、近況について教えてくださという私のリクエストに対して、青年会副会長



図12 2021年の春祭りの様子
(撮影 小谷紘樹)



図11 近況について語る升本一理
(撮影 升本一理)

自らが映像を撮って送ってくれたものです。また図12は、二〇二一年の春祭りの様子です。去年に続いて今年も、コロナのために春祭りは神社の中だけで行われました。神輿はもちろん、大太鼓なども出せなかった様子もオンタイムで私のほうに送ってくれました。

以上から、私が行ってきた作業と今回のモバイル展示についてまとめさせていただきます。一つはショウゴロウフィルムのような形で過去の映像資料というものが出てきます。こちらは、文書や民具と同様に地域の過去の記録として検証し、読み解くことができる資料として、しっかりと保存し、活用する方途を探るべきものです。他方で春祭りの映像は、研究者である私の視点から、地域文化としての祭りの再興を記録し、編集し、展示として表象した作品になります。それは、不特定多数の人たちに地域社会で起きている現実を知ってもらうとともに、当事者たちにも自分たちの活動を自省し、新たなモチベーションにつなげて欲しいという思いがありました。

つまり映像や画像は、それ自体が文化資源としてさまざまな活用の可能性があるとともに、祭りのような無形の文化の継承や民具のような物質文化を作る際の技術の記録も含めた文化資源の媒介となり得るものになってくる。文化の可視化・高度化に際しての一つの有効なツールになり得るわけです。

さらに今日行われているシンポジウムのようなオンラインによるデータのやりとりや資料の紹介も含めた、広い意味でのコミュニケーションの双方向性を促進できるメディアとしても活用可能だろうと思います。これは決して研究者の間だけではなくて現地の人たち、あるいはフィールドワークの一つの現場としても、こういった形での実践、営みがあり得るだろうと思うんですね。

状況によっては距離を超えた調査・研究の継続性というものを担保し得る形になるだろうとも考えられます。残念ながら現在のコロナ禍で我々の移動も制限されている状況の中で、様々な問題を共有したり、あるいはメッセージを発信したりする、そういった記録映像の意義を高めていくものにもなるだろうと考えています。

そして強調しておきたいのは、こういった活動の一つ一つが地域文化を、共創、つまり、共に創る行為であり、既存の文化を単に維持するものではなくて、文化の創発につながるものであるだろうと考えております。

というわけで、以上私のほうからの発表を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

報告5

アジアにつながる地域文化

―上海・長崎・大阪という文化街道

劉 建輝（国際日本文化研究センター 教授）



国際日本文化研究センターの劉建輝と申します。今日、私はアジアにつながる地域文化について簡単にお話をさせていただきたいと思います。機構内の先生方はご存じかと思いますが、実は日文研は地域文化のプロジェクトには参加しておりません。そのため今までの経緯も私は正直あまり存じ上げておりません。今日はほとんど捨て身の覚悟でお話をさせていただきたいと思っています。ちょっと場違いな話になるかもしれませんが、その点はお許しただきたいと思っています。

私はここ数年、ずっと仲間と一緒に長崎を中心に東アジアの文化交流を共同研究という形でやってまいりました。今日はその長崎、それから大阪について、かなり無理なところもありますけれども私たちの取り組みを少しご紹介したいと思っています。

これまでのお話をいろいろ伺って、皆さんはかなり専門的に地域文化を研究されているような印象を受けました。私の専門は文化交流史ですので外に開かれる地域文化、そういう側面につい

て少し考えてみたいと思います。地域文化というものは常に他文化あるいは異文化と交渉して成り立つ一面がありますので、いわゆる内部の、つまり人と人をつなぐだけではなくて、人と人がいかに外部とつないだかというのも一つの問題提起になるのではないかと考えています。

そういう意味では東アジア文化圏というのが古代から近代までずっと存在し、特に近代に関しては、これはあまり言われていないんですけれども、やはり西洋受容の共同体、つまり文化の面で一緒に西洋近代を受容した、そういう側面もありますので、その角度から少し考えてみたいと思います。

特に近代知という、西洋のいろいろな知識や文化の伝来について、これは実は中国のほうが日本より若干先に受け入れていて、そのあと中国から日本に伝わってくる、そういうことをまず押さえた上で長崎や大阪のことについて少しご紹介したいと思います。

まず、ここで一つどうしても確認しておきたいのは、実は日本の近代史研究においてずっと長崎の出島の役割を強調してきたということです。つまり日本の近代は、オランダ人のいる出島を通していろいろな情報や知識が入ってきたので、そこからすべてが始まったとの見方です。私はこれを出島史観と呼んでおりますけれども、この見方に関してはもうちょっと検討しないといけないのではないかと考えています。というのは後で申しますけれども、隣の唐人屋敷ちやうじんやしきの役割も実は一緒に視野に入れないといけない。そこから中国ルートの情報も入ってきており、その中にも西洋近代知的な内容を持っているものがたくさんあります。

ただ、長崎、そして大阪にたどり着く前に、若干助走が必要なので、まずなぜ中国からかとい

うことを簡単にご紹介したいと思います。南の広州に十三行^{じゅうさんこう}という場所があります。実はここは出島と一緒に長い間中国の対ヨーロッパの貿易拠点でした。その貿易体制は広東システムというんですけれども、特にヨーロッパ各国の東インド会社と中国政府との間の貿易を支えるものとして機能していました。主にお茶や生糸、陶磁器などを輸出入していたわけです。このシステムはおよそ二百年近く続いたんですけれども、ロンドンなどヨーロッパ各地から広州まで長年にわたってずっとこの貿易ルートが維持されていました。

しかしこの各国の東インド会社との貿易ですが、十九世紀の初頭になりますと、それがだんだん縮小したというか、ちよつと別のシステムに取って代わられる事態が生じました。十三行についてご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、いわば広州の郊外に造られた一つの外国人居留地のようなものです。各国の商館がかなり立派に建てられて、内外の商人たちがここで商売をやっていたわけです。三つのストリートにたくさんのお店が並んでおり、かなり大規模な貿易拠点となっています。

ここに十九世紀の初めに従来の政府間の貿易に代わっていわゆる自由貿易体制が入ってきます。つまり東アジアにおいて資本主義がこの時点から始まったと私は考えております。例えば東インド会社を持たないアメリカの商人たちが参入してくる。ヨーロッパからも東インド会社と関係のない個人貿易商がたくさん広州にやってくる。そして彼らによる貿易額がだんだん大きくなって、従来の政府間貿易額を上回ってしまう逆転現象が生じてくるわけです。その意味では、まさにここでのいわゆる近代資本主義の萌芽的なものが誕生したと言えます。

個人貿易商をたくさん迎え、後の租界のような存在となった十三行ですが、その変化に伴い、これまでの商業活動以外に文化活動も盛んに行われるようになりました。理由の一つに、実はこの時から多くのプロテスタント宣教師も十三行に入ってきましたので、彼らは伝道のために中国語と英語の新聞や雑誌を何種類も作っていました。地元の中国人とも頻繁に交流し、時には施設内でダンスパーティーのようなものも催していました。これらは本来、法律上許されないことですから、彼らはかなり大胆にやっていました。

宣教師たちが文化事業としてもっとも力を入れたのは聖書の翻訳と中国語・英語辞典の編集でした。ロバート・モリソンという人を中心に、中国人の手助けを受けながら旧約聖書と新約聖書を順番に中国語に翻訳し、また四万字に及ぶ華英・英華辞典を作っていました。これらの辞典が日本にも伝わってきて、一部の蘭学者の間で読まれていました。そしてここからさまざまな近代的概念も生まれました。つまりこのモリソン辞典をはじめ、その後も宣教師たちの編集した一連の英華辞典により西洋の概念がつつぎつつぎと中国語（漢語）に訳され、後の近代概念の成立に大きな影響を与えていたわけです。なお、文化事業とすこし離れますが、一部の宣教師がまた医者としても活躍し、十三行の医療所で眼病の治療や外科手術などを行っていました。

このように、広州でさまざまな活動を展開していた貿易商人や宣教師たちですが、鴉片戦争後、実は全部上海に移っていきます。上海の外灘（バンド）というところを新たな拠点として、彼らはさらに活動の規模を広げていきます。そして彼らの移動に伴い、中国側の商人や知識人たちもここに集まり、その活動を補佐するかたちで彼らのもとで働くようになります。これは中国史上

はじめて遭遇する事態で、大きな歴史的転換を意味するものと思われます。つまり外国人に雇われる商人や知識人の集団がここで突然誕生し、その勢力がいずれ中国近代の進路を左右するものとなっていきます。

そして、この外国人たちの活動が上海だけに止まりませんでした。一八五九年の幕府による「安政の開国」を迎えると、彼らは早速日本にも人員を派遣してきます。幕末で名を馳せていたトーマス・グラバーという人をご存じかと思いますが、彼なんかはまさにジャーディン・マセソンというかつての十三行の商社によって上海から派遣されてきた人物です。

上海における宣教師たちの文化活動ですが、多くの現地知識人の協力を得たこともあって、さらに飛躍的な発展を見せています。その一つはたとえば、西洋の歴史や地理、数学などの本を数多く中国語に翻訳しました。また翻訳委員会を作って、集団で聖書を翻訳し、二十五万部も印刷して中国人に配布しようとしていました。中でも医学書が特に需要があつたらしく、内科、外科、婦人科などの本が何種類も中国語に訳されていました。

そして、これらの中国語に翻訳された本は、後に「漢訳西書」と名付けられますけれども、実はその後全部日本に伝来し、幕末の武士たちにたいへん愛読されていました。特に各藩はその翻刻されたものを藩校の教材として使用し、そこから西洋に関する知識の理解と普及を図ろうとしていました。一度彦根藩の蔵書を調査したことがありますが、今でも「開国文庫」として、多くの「漢訳西書」がそのまま残されているんです。

ここから長崎の話に移るんですけども、先ほども申し上げましたように、長崎には昔から唐

人屋敷という中国人の滞在施設が存在し、そこにはいわゆる来舶清人たちが常時数千人の規模で生活しているわけですから（図1）。そして彼らと会うために日本の各地から多くの武士たちがやってきます。もちろん出島にいるオランダ人を訪ねるのも一つの目的ですが、ほぼ両方と一緒に交流していたんです。つまり中国からやってきた彼らに漢文の本を求めたり、海外の情報を探ったりするために武士たちが長崎に集まっていたわけです。

ちなみに、来舶清人と武士たちの交流を仲介する人々もいました。唐通事（とうつうじ）という現地在住の帰化した中国人たちです。制度的に常時八十名もいるこの集団が両者のパイプ役を果たしていたのです。長崎にやってくる船は南京船と言って、おにも乍浦（さっぽ）という杭州湾にある港から来航していました。小さい町ですけれども、周辺に寧波、杭州、蘇州などが点在し、いわゆる江南の文化が集約された形でここから日本に送り出されていました。

また出島との比較ですが、まずその規模がだいぶ違います。出島の場合は十数人から数十人までの間ぐらいでしたけれども、唐人屋敷は最大五千人近く収容していたと言われています。そういう意味で、対外交流の主役はむしろこっちではないかと私は考えています。少なくとも両者が

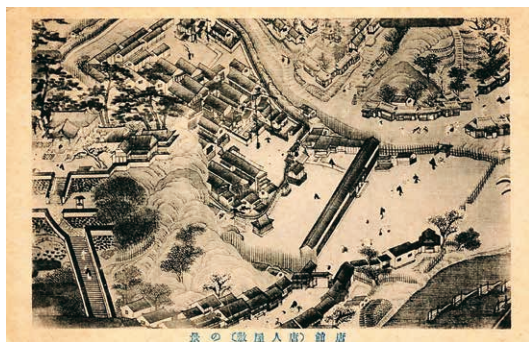


図1 唐人屋敷

並んで窓口としての長崎を支えていたわけで、出島だけを強調するのは如何なものかと思います。外出に関して若干の制限がありました^が、唐人屋敷の中で中国人たちがかなり多彩な生活を送っていました。例えば、宴会をやったり、「明清楽^{みんしんがく}」という音楽を演奏したり、また芸者を呼んで一緒に遊んだりしていました。時には日本人に中国語を教えたり、あるいは日本人から日本語を教わったりするような場面もありました。これらについては現地の人が結構いろんな記録を残しているので、今でも当時の様子をかなり詳しく知ることができます。

来船清人はもちろん商人が中心でしたが、高い教養を持つ文人たちも多く含まれていました。中には当初から長崎の遊郭を目指す目的で来航した人も少なくありませんでした。現在確認できるこの文人集団はおよそ三五〇名以上に上りますが、彼らはいわゆる文人趣味と言われていた^{きん}琴書画^{きしやが}のすべてにわたって日本人と交流し、盛んに切磋琢磨していました。

特に絵画については、来船清人たちがもつとも活躍しており、多くの日本人の弟子を育てました。その弟子たちを中心に後に文人画を得意とする長崎派という流派まで成立し、大阪や京都の画壇にも大きな影響を与えていました。

「琴棋書画」などの伝統的な技芸とともにもう一つ、きわめて重要なものも長崎に招来されました。鴉片^{アヘン}戦争以降の国際情勢と内容とする漢文の書籍です。中でも一番武士たちに愛読され、影響が大きかったのは『海国図志』と『瀛環志略^{えいかんしりやく}』の二冊です。前者は魏源^{ぎげん}という学者が先ほどの十三行などで収集した資料を整理したもので、後者は徐繼畲^{じょけいよ}という官僚が福建在住の宣教師やイギリスの外交官などから情報を仕入れて編集したものです。両者とも出版後すぐ日本に伝わり、

武士たちに多くの海外情報を提供していました。

全国から長崎にやってきて、オランダ人や中国人と交流した各藩の医者や文人、画人など合わせて五百人ぐらい確認できますが、その多くはこういった海外情報を探るために長崎を目指していたわけです。たとえば、儒学者の頼山陽（らいざんやう）や尊王攘夷で有名な吉田松陰、高杉晋作、また維新運動で活躍していた大隈重信、岩崎弥太郎などはみんな一定期間に長崎に滞在し、出島と唐人屋敷を通して情報収集をやっていたのです。

そして彼らの外国人、特に中国人との交流を支援する人もいました。小曽根乾堂（こぞねけんどう）という現地の有力者が自宅をサロンのように提供し、書画の観賞などを通して両者の接触に多くの便宜を図っていました。また彼自身も中国人に篆刻の技術を習い、後に明治天皇の最初の玉璽（ぎょくじ）を彫るなど維新後も大いに活躍していました。

日中文人の交流の場として、長崎の丸山遊郭も大変重要な役割を果たしていました。中国人がわりと自由に出入りの許されるこの場所において、両者が芸者と一緒に宴会を開いたり、書画を観賞する展覧会を催したりしてかなり盛んに交流していました。長崎の料亭花月に今でも当時中国人を接待する「唐人の間」という部屋がそのまま保存されており、往時の両国文人の交歓する様子を想像させてくれます。

先ほど、唐通事のことをすこし紹介しましたが、彼らの役割ももっと重視しなければならぬと思います。中国からの来船清人、国内の来訪武士に次いでこの現地在住の知識人集団は単に前者たちの仲介役だけではなく、それ自身も海外文化の大きな受け皿になっていました。対外交渉

の最前線に立っていた彼らはいち早く英語の勉強をやり出し、まだ英語の人材が少ない幕末においていけば先駆者的な役割を果たし、大変な活躍を見せていました。そして維新以降もそのキャリアを生かし、中央から地方までの多くの重要ポストにそれぞれ就いていたのです。

もう残りの時間が少なくなりました。最後に大阪の話をしただけご紹介させて下さい。長崎と大阪をつなぐ代表的な人物として、画家の木村兼葭堂きむらけんかどう、三菱創立者の岩崎弥太郎、「大阪の恩人」と言われた五代友厚、そしてもう一人、何礼之がれいしという元唐通事を挙げることができます。

まず木村兼葭堂ですが、大阪の北堀江を活動拠点としていた彼は、四十代頃に長崎に遊学し、唐人屋敷などで現地の唐通事や来舶の中国人画家たちと盛んに交流し、そしてそこで学んだ技法を大阪に持ち帰り、大阪の画壇だけでなく、京都の画壇にまでそれを広めていました。

ちなみに木村がお師匠さんとして仰いでいたのが鶴亭かくていという黄檗僧おうはくそうですが、彼は享保年間に来日した沈南蘋しんなんぴんという元宮廷画家の孫弟子に当たる人で、本人も長崎で長年修業した後、大阪にやってきて、近畿一円でその画業を伝えていたのです。

岩崎についてはもう皆さんよくご存知かと思いますが、彼も若い頃、海外事情を探るために、土佐藩から長崎に派遣されていました。滞在中、岩崎は唐人屋敷などを通して熱心に情報収集に励んでいただけでなく、いわゆる対外貿易のノウハウも学んでいたと思われます。後に彼は大阪にある土佐藩の蔵屋敷を拠点に起業しますが、それがまさに長崎での体験を原点にしています。そしてもう一人の五代友厚ですが、彼はまず若い頃に上海に渡航しており、当時では大変珍しい海外体験を持っている人です。その後長崎に行って、先ほどのグラバーと一緒に合弁会社を作っ

たり、また維新後大阪造幣局の立ち上げに携わったりしてまさに上海・長崎・大阪の「近代街道」をそのまま体現しているような存在です。特に造幣局に関しては、実はその運営ノウハウのかかなりの部分が例の十三行の商人たちが香港で作った香港上海銀行から来ています。香港上海銀行は創立者こそ違っても、それを支えていたのはほぼ全部がかつての十三行の商社で、その設立の目的ははつきり東アジア一円に対するイギリスの植民地的金融支配にありました。大阪の造幣局だけでなく、長崎に日本最大の支社を置いたこの銀行はまた日本の植民地的金融支配のために立ち上げられた横浜正金銀行にも運営ノウハウを提供しており、十九世紀半ばから今日まで絶大な影響力を維持し続けています（図2）。

最後に元唐通事の何礼之という人を簡単に紹介します。彼は世間的にあまり知られていませんが、実は非常に大きな存在です。唐通事時代にほぼ独学で英語を勉強し、その後幕府の開いた開成所教授並にまで上り詰めた人です。岩倉使節団に通訳として随行したり、また大阪で洋学校、つまり英語学校を作ったりして、維新前後の時代に実は大活躍していました。

このように、長崎にしても大阪にしてもいわゆる「地域文化」を語る際に、やはり地元根差



図2 香港上海銀行長崎支店

した文化と外に開かれた文化、その二つの側面を一緒に考えないといけないのではないかと思
います。そして小さい地域の独自性、自己完結性だけではなく、それを内包するより大きな地域、
今日の場合で言うところつまり東アジア地域との関連性、共通性も同時に視野に入れるべきだと思
います。その意味で、地域間の人と物の移動がきわめて大事な事象としてもっと取り上げなけれ
ばならないと考えています。まったく場違いなお話でしたが、あえてここでいろいろご紹介した
次第です。ご清聴ありがとうございました。

報告6

日々のくらしと地域文化

―新潟県奥三面の山のくらし

日高 真吾（国立民族学博物館）

それでは、第一部の最後の報告ということで、私からは「日々の暮らしと地域文化―新潟県奥三面の山のくらし」として、ご報告させていただきます。よろしく願います。

改めまして国立民族学博物館の日高です。よろしく願います。私からは「地域文化の宝箱」という教育キットについての報告をさせていただきます。この地域文化の宝箱とは、博物館・資料館で所蔵されている民具をはじめとする民俗資料等を、能動的な学びに結びつけることを目的に開発したものになります。また、この宝箱は、博物館・資料館の見学の事前学習、事後学習に役立てることができ、さらに地域に学びの場を広げていくことを狙いとしています。つまり今日のシンポジウムのテーマでもある研究成果の可視化・高度化の一つのモデルとして提示するものであるということです。なお、地域文化の宝箱の利用者の主な対象は、地域の博物館・資料館を見学する予定の小学生を想定しています。



の、そして裏側や内側の関係性に気づくことができるものが入り、例えば触れる実物資料や複製品、あるいは素材のサンプルといったものから発見できるようになっています。

二つ目は、五感や体全体を使うことで実感できる学びです。ここには巨大な資料の一部や原寸大のグラフィックから実感できるようになっており、実際の場所や物にアクセスできる情報を入れていきます。

三つ目が、実際に使用したり体験したりすることで理解を深めていく学びです。ここでは試してみることで成り立ちや仕組みを確認できるもの、難易度・利便性・所要時間などを実感できるものなどから理解を深めていきます。

四つ目は広い視野、長い時間軸で考えることができる学びです。ここでは、現在に形を変えて伝わっているモノとの比較から、原理や工夫を分析して探求することができます。また、現在でも形を変えずに残っている暮らしの営みやモノから、地域文化の背景について考えることができます。

五つ目は、複数人で取り組める学びです。ここでは、一つのモノを通して、共同して学ぶことで、それぞれの体験や考え方をお互いに確認しながら学びを深めていくことができます。

まとめると、地域文化の宝箱は、次に示す五つの学びを得ることを目標としています。まず一つ目は、地域文化の宝箱は、いわば、「博物館見学の予告編、見どころは博物館にあり」ということを前提にしていることです。二つ目が「コンパクトな学びも深い学びもできる」ということです。地域文化の宝箱には、テーマごとにパックされたモノがおさめられており、利用者の目的

によって概要を学んだり、あるいはより深く学んだりすることができる仕組みを持っています。そして、三つ目が、「先生と生徒と一緒に学びを進められる」ということです。先生自身、地域文化の宝箱の事前学習をしなくてもパックされた教材を順番に展開していけば、生徒とともに地域文化の宝箱に収納されている地域文化を学んでいくことができる仕組みとなっています。四つ目は、「もっと知りたいくなる気持ち呼び起こす」ということです。ここでは博物館の資料や複製品を実際に手にとれるもの、あるいはクイズ感覚で学べるツールを入れることで、子ども達の関心を高めることを意識しています。そして五つ目が、「もっと知りたくなった意欲に応える道筋、方向を示す」ということです。ここではこの地域文化の宝箱の製作で参照した参考図書やDVDなどをおさめ、時間があるとき、あるいは興味を持ったときにこれらの情報にアクセスできる仕組みをとっています。

それでは具体的な地域文化の宝箱の事例として、「奥三面の山に生かされたくらしパック」(以下、奥三面パック)を紹介します。奥三面を含む現在の村上市は一九六七(昭和四十二)年八月の集中豪雨で三面川が氾濫する羽越水害が起こり、大きな被害を受け



図2 地域文化の宝箱

ます。この水害を契機に三面川の治水のため、奥三面ダムが建設されることとなりました。このダム建設で、奥三面の集落はダムに沈んでしまうことから、閉村を余儀なくされました。現在、ダムの底に沈んだ奥三面の生活文化は、博物館施設の縄文の里・朝日で紹介されており、奥三面パックは、縄文の里・朝日の展示内容に基づいて製作しました。

地域文化の宝箱の仕組みは、このような旅行用のトランクにテーマごとにパックした教材がおさめられています（図2）。このデザインは、私が所属している国立民族学博物館で運用している教育キット「みんなばっく」を参考にしています。

奥三面パックは、六つのテーマに沿って教材がまとめられ、パックされています。「はじめに、奥三面はどこにある?」、「一・縄文時代の奥三面」、「二・奥三面の一年の生活サイクル」、「三・奥三面の狩猟文化」、「四・奥三面の漁撈文化」、「五・奥三面の採集文化」の六つのテーマで構成されています。

「はじめに、奥三面はどこにある?」パックでは、同じアングルから撮影された現在の奥三面ダムと昔の奥三面の集落の遠景写真をパネルにしています。また、村上市の全域地図から、奥三面の集落がどこにあったかを示すパネルを用意しています。

「一・縄文時代の奥三面」パックでは、三千年以上前から奥三面という地域に人が住んでいたことを紹介しています。そして実物の縄文土器や複製品を入れ、実際にさわって感じる事ができる仕組みを持っています。このことで子ども達は、縄文土器の複雑な造形技術あるいは美的感覚を感じることができる仕組みとなっています。また、こうした体験を通じて奥三面にはすば

らしい縄文時代の遺跡があり、たくさん縄文土器が出土してきたことを知り、奥三面の長い歴史に関心を持ってもらうことを期待しています。図3は、重要文化財に指定されている人面付土器の複製品です。3Dスキャンしたものを3Dプリンターで打ち出し、彩色をして仕上げました。この土器はじんめちゃん・じょうもくんという縄文の里・朝日のイメージキャラクターのモデルにもなっており、子ども達にも親しまれていることから、最初に興味を持ってもらうきっかけの役割も与えています。また、縄文カレンダー（図4）を用いながら、現在の四季の暮らしを比較することで、縄文時代の生活のサイクルとあまり変わらない暮らしの文化が奥三面には伝えられてきたということを紹介しています。なお、ここでは奥三面の人々が縄文時代とずっと同じ生活を送っていたみたいなイメージを子ども達に持たせることを目的としているわけはありません。奥三面の人々がそれぞれの時代に応じて生活スタイルを変化させながらも、自然と共生しながら自然の恵みを利用していたことについて学ぶことを目的としております。

「二・奥三面の一年の生活サイクル」パックでは、奥三面の季節ごとの生業をカレンダーで示しています（図5）。ここでは春



図4 縄文カレンダー



図3 縄文土器の複製品



図5 奥三面の1年間の生業カレンダー



図6 狩猟装束の顔出しグラフィック

夏秋冬の奥三面の自然環境を存分に利用し、自然と共生しながら暮らしてきた奥三面の人々の生活のリズムが理解できる仕組みとなっています。

「三、奥三面の狩猟文化」バックでは、原寸大の狩猟装束の顔出しグラフィックを作成しました(図6)。奥三面はマタギの里でもあり、独特の狩猟文化を育んできた地域でもあります。このグラフィックの狩猟装束は、マタギ、つまり猟師が雪深い奥三面の山々のなかで、熊やカモシカ、あるいはウサギなどの狩猟を行う際、身につけていたものです。子ども達には楽しく顔を出してもらいながら、猟師の装束に関心を持ってもらうことを目的としています。さらに、狩猟装束に使われている素材のワラやスゲ、アサ、毛皮などの標本サンプルを触ることができ、装束の着心地や防寒性、あるいは耐水性の工夫についてイメージできるようにしています。

「四、奥三面の漁撈文化」バックには、マスを突き刺して捕るための道具であるヤスを巻物状

にして、実寸大のグラフィックを作成しました。実際の長さは二メートル以上ある長いもので、このように巻物状にしておさめることとしたのです。子どもたちにはベアになって、図7のように広げてもらい、その長さを実感し、漁撈の場となる川の縁の深さも想像してもらいたいと考え、こういうものをつくりました。またヤスを使って捕っていたマスやヤマメの成魚の実寸大の縫いぐるみも用意し、道具と獲物の大きさの関係性についてもイメージできるように工夫をしました。

「五・奥三面の採集文化」バックでは、クリやトチ、クルミ、ゼンマイなど実際に採集されていた植物サンプルを入れています。ここでは奥三面の集落の山の幸を利用した食文化を知ることができることと、特にゼンマイの採集は現金収入の柱となっていて、家族総出でゼンマイ狩りを行っていたことを先ほどの奥三面の一年の生活サイクルのカレンダーから知ることができる仕組みとなっています。もちろんこれらのサンプルは実際に触ることができ、付属のカードからはその植生や利用のされ方について学ぶことができます。図8は、採集時に履いていたカナカンジキというものです。急峻な山の斜面から滑り落ちない工夫をしながら、採取をおこなっていたこ



図7 ヤスの実寸大グラフィック

とを実際に手にとって知ることができます。このように博物館がハンズオンの資料として活用してもよいと判断された実物資料もパックしました。

次に奥三面パックの村上市内での運用に向けての活動について紹介します。この奥三面パックは、学校教育での運用を目指しています。そこで教育キットを製作するにあたって、まずは奥三面から出土した縄文土器や山村生産用具を研究し、保存管理している縄文の里・朝日の学芸員、そして村上市教育委員会や村上市の文化財を担当している担当者の皆さんと、二〇一六年から二〇一八年の三年間をかけて、奥三面パックの内容を協議しました。

そして二〇二〇年度からの本格運用を目指して、二〇一九年の六月に村上市内の校長会において、校長先生に向けて、奥三面パックの紹介をしました。その後、八月の夏休み期間中を利用して、村上市内の学校の先生向けに奥三面パックの発表をしました。この説明会では思ったより先生方の関心が高く、結構使ってもらえるのではないかといい手応えを感じました。そして九月に、現在奥三面に最も近い学校区となります小学校で、具体的な授業のイメージを先生方と話し合う機会を設けていただきました。このとき先生方から奥三面の山の暮らしがどのようにすごいか、素晴らしいのかといったことを、子ども達にどう伝えればいいのか、なかなか難しいという意



図8 カナカンジキ

見が出されました。この点はこれまで学社連携、あるいは博学連携がなかなか定着できずにきた大きな要因でもあるのではないかと捉えています。つまり博物館で扱っている展示のテーマがなかなか先生方に伝わらないということ、博物館と学校教育の結節点が見いだせないという課題を感じたところです。そこで村上市教育委員会や連携博物館である縄文の里・朝日とともにその解決策を今、検討しているところです。その解決策の一つとして先生から示されたことが、いわゆるよそ者である私が何で奥三面の山の暮らしについて強い関心を持ったのかということについて子ども達や近隣の学校の教員も含めた研究授業で伝えてくれないかという意見が出されました。二〇二〇年度に臨もうとしていたのですが、新型コロナウイルス感染症の蔓延で現在もこの運用については見合わせている状況となっています。

さて、この奥三面パックですが、これは現在、開催中の特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年―」で展示しています(図9)。ここではその展示の内容について簡単に紹介しておきます。まず、奥三面パックの紹介パネルとともに、当館で製作した縄文土器の複製品を展示しています。次に奥三面の一年間の生業カレンダーと狩猟装束を紹介する展示をおこなっています。ま

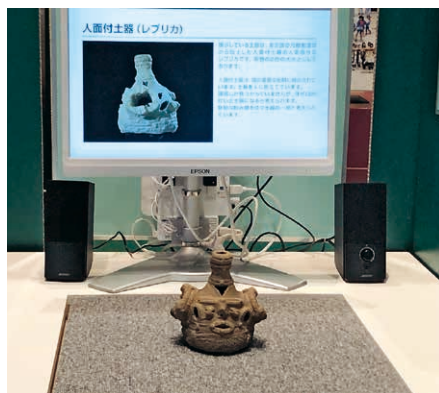


図9 Dr.みんぱこ

た漁撈のヤスの実寸大のグラフィックと奥三面の山の恵みを示したパネルを展示しています。最後に、現在、開発中の新たな展示ツールを紹介しています（図10）。この展示ツールは、視覚障害者あるいは聴覚障害者の方が、例えば私みたいな、いわゆる健常者と同じ情報について、展示を観覧しながら得られることを目指したもので「Dr. みんぱこ」と呼んでおります。

ここでは先ほど紹介した人面付土器の2倍の大きさの複製品を触ることで、字幕と音声つきの解説映像が流れ、この土器の持つ学術的な情報や形状の特徴について知ることができます。

それでは、まとめとして、この奥三面パックの今後の展望について紹介します。この奥三面パックは、先ほど述べましたように学校教育での運用を目指しています。そこで本格的な運用が実現しましたら、学校教育の現場で見えてきた課題を整理し、改良していきたいと考えております。また、運用に当たって学校の先生方と博物館の学芸員との意見交換の場を設け、持続可能な学校と博物館との連携のあり方を模索していきたいと思います。早く新型コロナウイルスの蔓延が落ちついて、こうした研究活動を再開できればと今は願うばかりという状況です。

以上、私の研究チームで試みている研究成果の可視化・高度化の一つの事例ということで、「地



図10 奥三面パックの展示

域文化の宝箱」の紹介させていただきました。どうもありがとうございました。

パネルディスカッション

「博物館における研究の可視化・高度化」

コーディネーター…渡辺 浩一（国文学研究資料館 教授）
パネリスト…西村慎太郎（国文学研究資料館 教授）

木部 暢子（国立国語研究所 特任教授）

吉田 丈人（総合地球環境学研究所・東京大学大学院総合文化研究科 准教授）

川村 清志（国立歴史民俗博物館 准教授）

劉 建輝（国際日本文化研究センター 教授）

日高 真吾（国立民族学博物館 教授）



日高…ただいまより第二部、

パネルディスカッション「博

物館における研究の可視化・

高度化」を進めていきます。コーディネーター

は国文学研究資料館の渡辺浩一さんをお願い



しております。ここからは渡辺さんのほうに

バトンをパスしていきたいと思いますので、

渡辺さん、よろしくお願

い

ます。
渡辺…はい、わかりました。

よろしく願います。私は渡辺浩一と申しまして、アーカイブズ学と歴史学を専門としております。どうぞよろしく願います。

それではパネルディスカッションを早速始めたいと思います。まず冒頭に、このシンポジウムを企画されました日高さんのほうから補足の趣旨説明を、特に可視化・高度化事業ということのかかわりでお願いできればと思います。よろしく願います。

日高 はい。わかりました。今回、このシンポジウムの骨格は私が中心になってつくらせていただいた関係がありますので、ご案内させていただきます。まず冒頭のご挨拶で、機構長の平川先生、あるいは当館館長の吉田のほうからご案内がありましたように、近年、人文学に求められる、あるいは期待されていることとして、最先端の研究成果を社会に対して可視化・高度化することが求められています。

ます。

つまりどういうことかというところ、最先端の研究成果を社会に向けてわかりやすく発信し、そこから起こってくる多様な視点からの議論を通して、さらに研究成果を鍛え上げていくことができるのではないかと。そうした研究サイクルを築いていくことが、現在の人文学に期待されている、あるいは求められている状況にあると感じております。

今回のシンポジウムの第一部では、地域文化をテーマとして、歴史や方言、祭礼や日常の暮らしに焦点を当てて報告させていただきました。もう一つ、日文研の劉さんのほうからは、アジアのなかの日本という、日本をアジアの一つの地域として見た場合の歴史研究の成果から、日本という地域文化を見つめていく、そうした報告をいただきました。これらの研究報告は、いわば最先端の研究の成果

ということになります。

では、これらの研究成果をどのように可視化・高度化するかということが今回のシンポジウムの命題になります。例えばこうした一つの活動モデルとして、研究成果を博物館という場を通して可視化・高度化する活動があげられます。すなわち、現在、国立民族学博物館、ここからは民博と申しますが、民博で開催中の特別展「復興を支える地域の文化―3・11から10年」は、災害からの復興にいかに関域文化が役立つのかについて明らかにした、私たちの最先端の研究成果を発信しております。

そのほか、これも民博の事例で恐縮ですが、現在はスマートフォンを利用した電子ガイドシステムの開発に取り組みとともに、電子ガイドの閲覧履歴から、ビデオテークのお勧め番組を紹介して来館者の方に楽しんでもらう

システムを開発しています。こうした新たな展示案内サービスを充実化させるという試みも最先端の研究の可視化・高度化の取り組みとなっています。加えて民博では、最先端の人類学の研究成果を常設展の中に反映できるように、この六年間、部分改修を進め、本館展示場、つまり常設展示場の充実化を図ってきました。

民博ではこのように、博物館を利用した研究の可視化・高度化の取り組みを進めてきたわけですけれども、このシンポジウムにより引きつけて、研究の可視化・高度化を示すものとして、本日、発表した内容は全て、現在開催中の特別展のエピローグ、「地域文化を継承する―人と人をつなぐもの」のコーナーを紹介しながら、皆さんにお示ししています。

そして、このシンポジウムでは、第一部の報告をもとに博物館という場を通じた研究の

可視化・高度化について議論を深めていければと考えております。そうした観点から渡辺さんには、コーディネートをお願いできればと思います。

渡辺…どうもありがとうございました。それでは次に、それぞれの発表に対して他のパネリストの方々の質問の時間に移りたいと思います。最初に西村さんの発表は「大字」^{おおあざ}の歴史を書くという実践のお話でしたが、いかがでしょうか。質問なりコメントなりご発言いただければと思います。よろしくお願いします。

日高…日高のほうから質問させていただいてもよろしいでしょうか。

渡辺…はい、お願いします。

日高…西村さんと、今日ご紹介いただいた地域の皆さんとの現在の関わりといったところで、月どれぐらいの頻度で一緒に活動してい

るのかを教えてくださいませんか。



西村…ありがとうございます。

ちよつと地域それぞれはばらばら、いろいろ違いますけれども、福島県浜通りという言い方でざっくり言いますと、大体月一ぐらいは向こうに行く機会があったりとか、あと、先ほど少しお話しさせていただきました「もろたけ歴史通信」というものの刊行をするために、地域の方々と一緒にやっている泉田さんなんかとは、月に二回ぐらいはいろいろそういった編集作業などをやりたりしております。そういったつながりが一番多いですね。あと、大字の区の総会などでいろいろと報告会とかをやったりしてたんですけれども、ちよつと今コロナの状況で、この二年間そういうのができないという状況です。

日高…ありがとうございます。もう一つ聞き

たいことがありまして、浜通りの、特に今日西村さんにご紹介いただいた地域は、福島第一原子力発電所の問題を避けて通れないと思います。言葉は悪いのかもしれませんが、あの地域に我々がより注目するようになったのは、原発の事故からという人も多かったと思います。ただし、原発の前から当然、これらの地域には人がいて、暮らしの文化を築いてきていたはずで、そうした歴史を掘り起こしているのが西村さんたちの研究活動かと思えます。そうした西村さんたちの研究活動について、地域の皆さんの反応というのはどういうものがあるんでしょうか。

西村…ありがとうございます。むしろ僕が現場に入って驚いたのが、いろいろな形で被災された方、あるいは親族を亡くされた方とか津波の被害に遭った方というのは多くいらっしゃるんですけども、特に古い話とか歴史

の話とか、あるいは自分の身近なときの昭和だったりとか平成だったりすると、話をしていると非常に熱心に話を言ってくれて、同時に僕のほうから古文書の話とかをすると、それに対してもいろいろなプライがあつたりして、僕自身も非常に勉強になっていきます。まあ歴史が全ていいとは限らないにしても、何かそういった歴史のことを話すことによって、非常に喜々として話してくれるというのは、もしかしたらプラスなのかなというふうに感じております。

日高…ありがとうございます。私の場合には民俗文化財を通して、被災地の方々との交流があります。やはり、かつて自分たちが安心していた暮らしの生活、記憶を思い出すというのは、復興に向けての効果を発揮する、あるいは原動力となっていくことがあると思いますし、まさにそうしたところでの下支え

ができる人文学の可能性を改めて感じるところがありました。どうもありがとうございます。

西村..ありがとうございます。

渡辺..どうもありがとうございます。西村さんの発表の最後のほうでは、可視化・高度化は課題であるような形でまとめられましたけれども、SNSを通じてプロセスを見せているという点でも可視化の領域に入っているのではないかと私は思いました。どうもありがとうございます。

西村..ありがとうございます。

渡辺..すみません、時間の関係で次の発表に移らせていただきます。次は木部さんの方言のお話でしたけれども、方言というものが気持ちが悪えられるというお話が非常に印象的だったと思います。ご質問、コメント、よろしく願います。はい、吉田さんお願いします。



吉田..はい、ありがとうございます。すごく興味深く拝見しました。自然環境とのかかわりでいうと、いろんな地域でもあると思うのですが、風とか水の流れとか、自然環境の詳細な認識が方言で語られることがかなりあると思います。方言が失われていくということとが、人々が自然環境を認識する、その認識そのもののあり方の変化にもつながっているのではないかと感じながら、先生のお話をお聞きしました。これに関して、先生が見ておられる事例でお話していただけませんか。



木部..どうもありがとうございます。います。自然環境にかかわる方言は、とっても多いです。

風の名称に関しては、古くは柳田国男の『風位考資料』（昭和一〇年）があり、各地方言は非常に豊富です。特に海岸部では漁師さん

が漁をするときに、風の方角を見て漁に出ていい日か悪い日かを決めなければいけませんから、細かく言い分ける地域では、十二方向ぐらいに区別する方言があります。でもいま、調査しても、ほとんど皆さん知らないと言います。昔の方言書には書いてあるのですけどね。

それからもう一つは風水です。どの地域でも家を建てたり、建物を建築したりするとき風水を見ながらいい方向を選ぶわけですが、でも、風水に関する用語も今はほとんどなくなっているという状況ですね。

吉田…人々の自然環境に対する認識自体も変わってきてると考えてよろしいのでしょうか。
木部…はい、そうだと思います。空を見たり海を見たり風を見たりして生活するということがもうなくなっているのではないのでしょうか。
吉田…方言がなくなっていくということにあ

らわれているということですね。

木部…はい。空や海や山や風を見なくても、今はスマホだとかGPSだとかで調べればいい。だから逆に、人間の感覚自体は衰えているかもしれませんが、自分で自然環境を見て判断する必要がなくなったのと同時に、その能力が衰えているかもしれないと思います。

吉田…ありがとうございます。

木部…ありがとうございます。

渡辺…短めのやりとりでしたら、もうお一方可能ですけれども。いかがでしょうか。川村さんお願いします。



川村…今日、木部先生のお話をすごく興味深く聞かせていただいたので、勉強になったことがたくさんあったのですが、今日のお話の中で関西弁でさえ存続が怪しいとおっしゃったので、それについて少しお聞きしたいと思い

ます。方言を記録していく、残していくといったときに、いま吉田さんがおっしゃったような自然にかかわるような言葉が注目されることがあると思います。僕も能登で風の方位のことを調べて、「アイ」、「クダリ」、「ヤスクダリ」、「タカクダリ」、「タバカチ」といった様々な呼称を調べたことがあります。

ただ方言の中には、間違いなく悪口を通り越して一種の差別用語も入ってくるわけですよね。ちょっとだけ言わせてもらうと、「何ぬかしとんねん、このばけ、いてもうたろか」と言った関西弁のきつい言葉がございます。「スポケ」あるいは「ダボ」のような言葉も含めて、これは記録すべきなんでしょうか。そういう、もつと社会関係みたいなものもあらわすものまで残していくべきなのだろうかというのを、少しお聞きしたいなと思います。

木部…はい。ありがとうございます。私は全て残すべきだと思います。それはそれで文化だし。関西の方がよく「あほ」とか「どあほ」とかおっしゃっても、それは東京の人が「このばか」と言うのとか何かニュアンスが違うということがよく言われます。そういうものも含めて文化だと思います。

言語研究者の中には、そういう差別的な用語は載録すべきではないという主張をなさっている方もいらつしやいます。しかし、そういうのを落としてしまうのもまた一つ重要な文化の記録を落としてしまうことになるのではないかと私自身は思っています。ただ、それで不愉快に思われる方がいらつしやるというのも事実です。以前、そのようなこともあえて載せていますというお断りをして、辞書をつくったことがあります。

渡辺…川村さん、よろしいでしょうか。

川村…すみません、ちょっといま最後だけ途切れたんですけれども。

木部…途切れました？

川村…はい。すみません。ちょっと聞こえなかったけども、大体おっしゃった内容わかりましたし、先生のお立場よくわかりました。ただ、そういう記録の問題と、これから残していつて絵本をつくつたり、子どもたちに伝えていくべき言葉というのはどこかでやっぱり選択しないといけないですね。で、今日は危機言語で出ていたアイヌ語なんかは逆に数詞が弱い、数を数えるということがなかなか難しい言葉なので、新たに継承していくときには、どうしてもそういう部分を創っていかないといけないということはアイヌのネイティブの人たちも言っている。そういう意味でも、残していくものと、取捨選択したり、新たに継承するための文法であったり、語彙

などにも必要になるんじゃないかなというふうに感じております。

木部…ありがとうございます。おっしゃるとおりです。方言のカテゴリーにない表現が現代社会ではたくさん生まれています。昔の言葉だけを使って今の生活を送るのは無理なので、今の生活ができるように、昔の言葉をベースにして、新しい文化に対応する言葉をつくっていつて継承しなければならないと思います。

それから子どもたちに伝える言葉と辞書として記録する言葉は分けて考えなければならなと思います。子どもたちにはできるだけ、「ああ、方言っておもしろいな。自分もしゃべりたいな」と思うような言葉を教える必要があります。そのために絵本を使っているわけですから絵本に使う言葉には気をつけなければならなと思います。ありがとうございます。

ございました。

渡辺…どうもありがとうございました。それでは次に、吉田さんの発表に関する質問とコメントをお願いしたいと思います。自然との交流というお話であったかと思えますけれども、いかがでしょうか。はい、日高さんお願いします。

日高…吉田さんのほうにお伺いしたかったのが、環境学が地域文化と接点を持った。そのこと自体が興味深く、私は吉田さんの研究を拝見させていただいているのですが、環境学と地域文化が接点を持つ方向へと展開していくきっかけはどのように生み出されていくのかについて教えていただければと思います。

吉田…私は環境学や生態学が専門ですが、生態学の中で見たときに、地域文化をどう捉えていくかというところは、ここ十年、二十年の間にものすごく進んできていると思います。

す。というのは、生態学は生き物を見ているわけですが、例えば言語が絶滅危惧にあるというお話がありました、多くの生き物も絶滅危惧にあつて、絶滅のスピードが非常に増しています。第六の大量絶滅時代と言われるような時代になっているわけです。それをどう理解するかといったときに、やはり人間のことを理解しないと理解できないのですね。

また、どう理解するかだけでなく、例えば、絶滅のスピードをどれだけ抑えるかと、生き物がいなくなることが人間生活にも大きな影響があることがますますわかってきて、早急な対策をどう進めていくかといったときに、やはり人間と自然とのかかわりをもう一度見直す必要があるというところが、出発点になっていると思うのです。

今日はあまりお話しできませんでしたけれ

ども、地球レベルで環境の変化や、特に生物多様性の損失は進んでいて、どう解決していったらいいかと考えたときに、社会全体が変わっていかないといけない時代になっています。これまで、いろんな対策をやってきましたが、それではもう追いつかないところまで来てしまったという認識がなされているところで、もう一度地域の中でそれぞれ自然とどう向き合っているかといふことが大事になってきています。そのため、地域文化が、生態学にとっても大事なテーマになっていると感じています。地球研は、地球環境学という名前がついていますが、地域の人と自然とのかかわり合いが、地球レベルでも大事な研究テーマになっていると認識しています。

日高…ありがとうございます。日ごろ私もあまり聞くことのないお話だったので、自分

のなかでも大きな刺激を受けました。まさか自分の住んでいる地域の近くの琵琶湖で、吉田さんが紹介してくれた文化が育まれていたのはとても新鮮な驚きで、これからもっと勉強したいと思います。

吉田…はい。よろしく願います。

渡辺…はい、どうもありがとうございました。それでは、次は川村さんの発表のほうに移りたいと思います。研究者と研究対象の相互関係の問題を、二つの映像制作の事例で非常にわかりやすく説明していただけたかと思います。質問、コメントをよろしく願います。はい、木部さん願います。

木部…どうもありがとうございました。実は私たちも同じように、録音資料を地域の人と一緒に掘り起こしていくことをやっています。昔、カセットテープレコーダーがすごく流行して、たくさんの方がカセットテープに

方言や民謡を録音しました。そのテープが今、家庭に死蔵されています。それを掘り起こしたいと思っています。そのときにちよつとお聞きしたいのは、提供してくださる方のプライバシーとか個人情報とか著作権とかの問題です。録音自体は随分昔のことなので、どういうふうになさっているかについて伺いたいと思います。

川村…はい、ありがとうございます。我々研究者が、著作権とか、現地の人たちとどういうふうにやりとりしているかということでしょうか。

木部…はい。ええ、やりとりしているとか、提供してくださる方をどうやって探すかということも含めてですけど。

川村…今回の16ミリフィルム映像に関してはかなり偶発的というか、我々が映像を撮ってるよという話が広まって、向こうの人たちも

思い出してくれたというところがあるわけです。だから自発的に資料が来たわけなんですけれども、実はいま同じ村で、画像データ、写真のフィルムなんかの呼びかけは、これは、皆月の村に対してお願いして、何人かは既に資料を出してくれそうな人を見繕ってはいったけれども、そこは村全体に対してお願いして提供してもらおうという形になっています。

博物館として、資料を貸借したり、利用したりする際の取り交わし文書みたいなものは一応つくることができるのですが、シヨウゴロウフィルムに関しては、個人が私への信頼関係のもとに自由に使ってくださいという形になっております。私としては原盤となるフィルムなどは、できたらお返ししたいんですが、やっぱりビネガーシンドロームが進んでいたって状態があまりよくないんです。それで、日高先生と相談させていただいたり

して、今後どういうふうにしていくのか思案中です。もちろんデジタルデータは全てお返ししたというか、できたものをDVDに焼いてお送りしたという形になっています。

音声の資料というのは、僕らも結構持っていたり、あと、歌ですね。逆に僕なんかが民謡の調査なんかをして、聞き取らせてもらった盆踊りなどの踊り歌なんかがあるんですけども、これも話者に意向を聞いてお返しするかどうか、必要があればデジタル化するような形でお返しすることも考えています。できるだけ資料は共有できるような形を目指しています。ただ、その後の利用方法なんかは個別に、できたら文書でちゃんと交わしておいたほうがいいんじゃないかと思えますね。

木部…どうもありがとうございます。歌なんかもたくさんあるんですね。

川村…はい。ありますし、うちの博物館でも

そういう資料が残っていたりもします。

木部…ああ、はい、どうもありがとうございます。

渡辺…どうもありがとうございます。すみません、時間の関係で先に進めさせていただきます。次は劉さんの「アジアにつながる地域文化」というお話でした。地域社会の有力者が長崎の唐人屋敷経由の文化を直接・間接に享受していた可能性があるなと思います。歴史的な立場からはお聞きしましたけれども、いかがでしょうか。はい、西村さん、どうぞお願いします。

西村…国文研の西村です。もともと研究が歴史学、近世史をやっていた者からすると非常に勉強になって。やっぱり我々の近世史の分野ですと、ここ二十年ぐらいは東アジア法文明圏みたいな言い方をして、東アジア全体の中で文化なり、あるいはそれぞれの「常識」

なりを考えなきゃいけないというのは結構言われるようになってきたんで、今回のお話も非常に勉強になりました。

また、僕の話に引きつけますと、今回話させていただきました福島県浜通りの近世文書の中で、お医者さんの家なんですけれども、東洋医学の陰陽五行に基づいた形の医学書が非常に多かったので、やはりこのあたり、東アジアと当然つながってる問題なんだなと思っ

て聞いておりました。それで一点質問なんですけれども、そういった交流史の中で、むしろ東アジアの文化が非常に日本に入ってきてるといえるのはよくわかるんですが、逆に日本の文化自体が上海だったりあるいは大陸のほうに何か影響を及ぼすというようなことであるものかどうかというのを伺いできればと思います。よろしくお願いたします。



劉 ..はい、ありがとうございます。いわゆる逆流現象のことですね。それはたくさん

あります。南宋の時代からもう日本の折り畳み式の扇子とか、またその後、これは倭寇と関係があるんですけども日本刀とかかなり日本から輸入されていたわけです。近代でいうと、今度は長崎と深い関係があるんですけども、例えば上海のレストランなどで女性が料理を運ぶ、サービスするというのも実は逆流現象の一つなんです。つまり中国ではもとと男性が「店小二」(ボーイ)と言って、そういう仕事をしていましたが、一八五九年安政の開国以降、多くの日本人が上海にやってきました、日本の料理店などで女性がサービスするという日本の作法をやり出したので、それが人気となって中国でも広まるようになりました。あとは先ほどの書画ですが、こちら

も明治以降、多くの中国人が来日し、日本の画法を学んだ後、それを中国に持ち帰って広めました。そういう意味での交流というか往来をたくさん確認することができます。

西村…大変勉強になりました。ありがとうございます。

渡辺…はい。どうもありがとうございました。それでは次に日高さんのお話のほうに移りたいと思います。奥三面の暮らしの文化というものや学校教育の場で伝えていく。特に自然との共生という点も含まれておりましたので、ほかの発表ともつながるお話だったと思います。いかがでしょうか。質問、コメントよろしく願います。はい、西村さんお願いします。

西村…すみません、たびたび失礼いたします。ちょうど偶然なんです、先月、横須賀市で報告をさせてもらったときにその聴衆の方

で、「みんなぱつく」でワークショップを見たんだよという方がいらっしゃったんで、ちよつと今日お話を聞いて非常に勉強になりました。ありがとうございます。

ちなみに、やっぱり僕も福島の話と絡めたいなと思って。福島の場合ですと子どもたちというか、帰還困難区域で農家ができなくなっちゃった二世三世の子どもたちが全国にいたりして、そういう人たちにも教えたりするような「みんなぱつく」がつけれるのかなと思っております。というのも先ほど、僕のことに対する日高さんのご質問で、言い忘れたんですけれど、やっぱり皆さん民具に関する興味ってすごくて、古文書とかよりもやっぱり民具とか、あるいは特に炭焼きが盛んな地域だったので炭焼きの道具とか、そういったこととかで何かこういった「みんなぱつく」みたいなのでできるのかなというふうに思っ

て。ちょっと具体的な事例になってしまいですが、何かご教示いただけたらと思います。お願いいたします。

日高 はい。ありがとうございます。多分、民具そのものを、これはこういう民具で、こんな使い方をしていましたというだけではきつと関心は持たれないと思います。今回のこの奥三面のバックなんかもそうだったんですけれども、利用者をまず想定しました。だから今の西村さんのお話で、対象が次の世代を担う二世三世の子どもたちということだったら、そういう子どもたちが一体どういうことに関心を持つのかなといったところを少しサーチしていったほうがいいかと思えます。今日紹介した奥三面のバックも、「縄文の里・朝日」の展示資料を見学しながら、どういうものに子どもたちが引きつけられるだろうかという想定問答を丁寧におこない、何

に、そして何で、興味を持つのかといったところまで落とし込んで、じゃあどういう紹介をしたら楽しんでもらえるだろうかという議論をおこないながらつくっていききました。

そうした意味では民具というのは結構使っていた人の記憶というのがまだ収集できる可能性を持っています。そこで、実際に使っていた人、あるいは使っていた情景を見てた人、そうした思い出なんかも組み合わせで紹介していくと、意外と自分のおじいさんとか、おばあさんの記憶というものとコミットさせて、子どもたちの関心を高めていく可能性があるのではないかと思います。なお、このような活動については、今回の特別展でいくと、第三章の一のコーナーで「牡鹿半島の民俗誌」というコーナーをつくっていて、これは武蔵野美術大学の加藤幸治さんが「復興キュレーション」という活動を提唱して、と

でも丁寧それぞれの民具にまつわる思い出、あるいは使用用途について調査をし、データを収集していきました。このような活動もとても参考になるのではないかと思います。どうもありがとうございます。

西村…大変ヒントになりました。ありがとうございます。

渡辺…どうもありがとうございました。

川村…いいですか。

渡辺…はい、どうぞ。川村さん。

川村…はい。日高さんへの質問で、返す刀で西村さんに返そうと思うんですけども。日高さんへの質問は、今のコロナ禍で教育現場や地域との連携が滞っているというお話をされてました。今回の民博の展示で、地味にすごい展示の一つに、インターネット、さらにZoomを使ったテレビ会議のような形で現地とやりとりしている様子が紹介されています。

す。津波の記憶を伝えるという、当時は中学生、今は大学生になっている人たちの試みを紹介している映像があるんです。そういった遠距離での調査実践を可視化し、高度化するような形での試みというのをこの奥三面でも試されることは不可能なんだろうかという話が一点です。

もう一つ、いま西村さんが民具の話をされましたが、西村さんが今日ご発表いただいた大字にかかわる歴史の話の中で、例えば民具を含めて、あるいは民俗学的なさまざまな主題、通過儀礼や年中行事や、よりコンテンツポラリーな形での記憶というものは、大字の歴史の中には組み込まなくていいんだろとかというのをちょっと思ったんですけども、いかがでしょうか。

渡辺…日高さんのほうからお願いします。

日高…はい、まず私からお答えさせていただきます。

きます。いま川村さんからご提案いただいた形で、やり方は、実は「マリンワールド海の中道」の館長だった高田浩二先生が、携帯電話とかを利用して遠隔授業をされていて、水族館にいる高田さんと学校の子どもたちが交流しながら水族館のことを学んでいくという先行事例があります。今回の私の試みは、そういう先行研究を参考におこなってみたものです。

ちょっとこのコロナ禍はなかなかおさまりそうにない、厄介なものになってきているので、今回の経験を活かしながら、インターネットを介した現地とのつながりについて、どういう可能性があるのかについてさらに実験的なことはしていきたいと思います。

ただ、ご存じのようになかなか日本の学校教育では、オンライン化が進まない現実もあります。そうしたところについていかにハー

ドルを低くしていくかが課題かと考えています。そのためにこちらからインターネットでつながるツールを含めて提供するサービスがいいのか、そうしたことも少し検討したいと思います。ただし、相手あつてのことでもありますので、そうした相手の方々とのディスカッションは必要かと思います。加えて、こうした試みは、まさにこれからは、新しい生活文化、そうした視点での方法論の構築にもつながっていく可能性もあると思いますので、ぜひ今年度の一つのテーマとして積極的に取り組んでみたいと考えています。ありがとうございます。次、西村さん、お話しします。

西村 はい。ありがとうございます。民具というか民俗学的なこととか、あと、今日のお話でいうと方言であるとかそういったことも含めて『大字誌』には当然入れていきたいし、

入れていかなければいけない記憶だろうなと思っております。今回ちょっとお話ししましたんですが、大熊町に川村さんに来ていたのはまさにそういった視角もありまして、ぜひ大熊でやる時には川村さんにその辺をお任せしたいというふうに思っております。よろしく願います。

渡辺…はい。どうもありがとうございました。パネルディスカッションの中で依頼が行われるという展開になってしまいました。申しわけありません、あと六分ほどぐらいしかなのですが、全体を通して何かご発言をいただければと思います。今の川村さんの質問で、かなり全体を通しての質疑にだんだん入ってきた感じもいたしますけれども。いかがでしょうか。

日高…私自身がこうした今回のシンポジウムを企画してきて感じたことは、私たち研究者

というのは、やはり論文をきちっと書いて、アカデミックな情報をしっかりと整えていく、そうした情報発信をしていくということが研究者としての務めだと改めて思いました。そして、こうした研究者の営みは、これから変わらない部分だと思います。

ただし、こうした研究成果は、じゃあ実は一体誰のためにあるのかという点で議論すると、答えがなかなか見いだせない。そもそも私たちの研究は、人を研究する学問だと思いますけども、研究対象としていた人たちに對して、私たちの研究成果はどういう形でお伝えすべきかは、ずっと自問しています。特に東日本大震災以降、私自身は文化財の保存が専門なので、そうした被災文化財を何とか救出して、一時保管して、応急処置して、ある程度安定した状態にしたものをお返しすることをしてきたのですけれども、ただそれだけ

では、やはり地域の人たちに返したことに
ならないと感じていました。

もちろん、こうした活動で明らかになった
ことを論文に書いてまとめていくことはでき
ます。しかし、それだけでは、一番、知って
もらいたい地域の人たちに伝わらないんじや
ないのかなと思っておりまして、そうした観
点からは、この研究の可視化・高度化、これ
がどういう形が望ましいのかどうかというの
はちよつと私自身はまだ消化しきれてない
ところがありますが、少なくとも研究対象と
なってくれた人々に対して研究成果を可視化
し、ディスカッションすることでより高度化
していく、こうした研究の展開は、これから
の研究の枠組みのなかで実践していかなけれ
ばいけないのではないかと考えています。
こうした研究の可視化・高度化についてど
うでしょうか。もちろん、今までおこなって

きた研究者としての活動は継続することは前
提として、これからはそうした研究活動に追
加していく形での研究の可視化・高度化を進
めることで、よりわかりやすく研究成果を発
信し、その結果から出てくる議論を丁寧に拾
い上げていく、こうした研究のスタイルとい
うものが今後必要になってくるのではないの
かなと改めて思います。それは今回のこの特
別展をつくりながらも感じたところでもあり
ます。そして、博物館という観点でいきま
すと、地域博物館は経営的にも活動的にも結構
大変なところが多いと聞いておりますが、そ
うした地域博物館のなかでも、博物館活動で
見いだされた研究を可視化・高度化する役割
を追加させる勇気を持って、取り組むことで、
地域住民の皆さんにその存在価値に気づいて
もらえるのではないかと考えます。そのよう
な可能性について、今回のシンポジウムは示

せたのではないかと考えます。私のほうからは以上です。

渡辺…はい。どうもありがとうございます。はい、吉田さんお願いします。

吉田…いま日高さんがおっしゃったことはとても大事なことで、お聞きしてました。地域で起きている課題をどうやって解決するかということで、研究者に求められていることが大きくて、それは人文科学も社会科学も自然科学もないと思うのですが、学術全体に対して求められていることがとても大きいと思います。その期待にどう応えていくかと考えたときに、これまでと同じような研究者の評価のされ方では多分足りない時代が来ているのではないかと感じています。

このままでは、若い人が育ちににくいですね。私のような自然科学の分野だと、論文をどれだけ書いたかとか、どういうジャーナル

に論文を書いたかとか、どうしてもそういう尺度で評価されがちなのですが、これだとこれまでと同じような人材しか育ってこないわけです。これだけではなくて、地域で課題を解決できる、そこにどれだけ研究者が寄り添っていけるかというプロセス、あるいはここでの成果を評価されるようになっていかないと、なかなか難しいのではないかと思います、今お聞きしていました。高度化というときに、その地域の課題をどうやって解決していくのか。そこに研究者が、学術が、どれだけ貢献できるか。それを考えようとする、やはり新しい評価のシステムも考えていく必要があると思います。ありがとうございます。

渡辺…はい。ありがとうございます。関連して、いかがでしょうか。木部さん。よろしくお願いします。

木部…全く日高さんや吉田さんと同感です。

私たちの研究のスタイルも評価も、これから大きく変えていかねばならないと思います。

そのためには学会全体、あるいは評価システム全体、そして地域の人も一緒になって社会の価値観全体を変えていかなければいけないと思います。そのためにはどうすればいいか、すぐにはわかりませんが……。私たちのようなこつこつと地域の人と一緒に資料を集めたり、記録したりする研究はとっても時間がかかります。すぐには成果が上がらない。だからそれを若い人に強いるのは何か気の毒な気がします。でもそれがちゃんと評価されるようになれば、こんな楽しい仕事はないので、若い人もやると思います。それをどんどん私たちが声を上げて変えていかなければいけないと思っています。

渡辺…それでは恐らくまだまだ語り合いたいたいところがあるのですけれども、すみません、

時間になりましたのでここでこのシンポジウムを閉じざるを得ないということです。今日は本当にたくさんの方の貴重な発表をいただきまして、さらに時間は少なかったですけども、非常に有益な質疑応答がありました。これはやはり最後に木部さんがおっしゃっていたように、社会の価値観を変えていけるような研究というものをこれから私たちは進めていかなければならないと改めて感じた次第です。今日は本当にどうもありがとうございました。

これで総合司会の日高さんにお返しします。**日高**…はい。渡辺さん、どうもありがとうございます。本日に短い時間になってしまいましたけれども、しっかりとコーディネートしていただきましてありがとうございます。ご視聴いただきました皆様、本当にありがとうございました。

閉会挨拶

青山宏夫（人間文化研究機構 理事）



皆様、今日は長時間にわたりこのシンポジウムにご参加くださいましてありがとうございます。
人間文化研究機構の青山です。今回はオンラインでの開催ということで、東京から参加した発表者もありますが、お聞きくださった方々の中にはさらに広く全国各地からご参加くださった方も多いのではないかと思います。今日このシンポジウムを開催するに至った事業の一つである「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」、これを人間文化研究機構の立場から担当している者として閉会に当たり一言ご挨拶申し上げます。

今日のシンポジウムはちょうど十年前、二〇一一年三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震による未曾有の大災害からの復興について、地域文化の視点から明らかにする特別展とともに、その研究成果をいかに社会に伝え、生かし、そしてさらなる研究を進めていくかということをテーマとして開催されました。

十年前のその日、私は千葉県におりましたが、震度は5強でした。そのとき私は洪積台地という比較的安定した地盤の上にいたのですが、それでも生涯で初めて地震の揺れによって身の危険を感じた、そういう地震でした。ちょうどそのころ私は、その秋に予定されていた「風景を記録

するということにはどんな意味があるのか」というテーマの、風景写真の展示を準備していたときでした。岩手県や宮城県、あるいは震源から離れた千葉県でさえも海岸部のまちや村の風景が津波によって一変した映像をテレビで見ても、言葉を失ったことを今でも鮮明に覚えています。

ふだん何げなく見ていた風景が一瞬のうちに崩れ去ってしまったときに、それが我々の生活にとって欠かせないものであったということに気づいた人も少なくなかったのではないかと考えます。あの有名になった陸前高田の「奇跡の一本松」、これが復興のシンボルと呼ばれたのも、単に津波に耐えたということ以上に、そうした思いも込められていたのではないかと思います。

震災によって地域の歴史や文化の資料が失われ、それと同時に地域の人々が育んできた地域の文化もまた失われようとしているときに、同じような思いを抱いた人も少なくなかったのではないかと思います。まだ復興どころか復旧もままならない中であって、それでも地域の祭礼とか郷土芸能とかさういった行事を何とか取り戻そうという姿は被災した各地で見ることができました。それはまさしく震災によって地域の文化が再発見され、再認識されたということだと思います。

震災からの復興に何が必要か。それは鉄道であるとか道路であるとか学校だとか病院だとか住宅、上下水道、電気だとかガス、そういったインフラの整備が必要であることは言うまでもありませんが、しかしそこに住む人々が暮らしていくためには地域のコミュニティもまたそれ以上に必要であって、その紐帯となるのがそれぞれの地域の自然環境に即して、人と人とのつながりによって生まれてくる地域の文化だと思います。そしてそれが復興の原動力になるということ

とは、今は残念ながらやむなく閉館していますが、今ちょうど開催しているはずだった特別展「復興を支える地域の文化」で明らかにされているところだと思っています。そしてその地域文化がいかに貴重なものであるか。ともするとふだんの生活の中では気づくことができないようなその大切さというものを、学術的な視点から明らかにし、地域の人々に可視化してわかりやすく伝え、ともに享受する方法と意義を議論してきたのがこのシンポジウムだったと思います。

さて今日のシンポジウムの一つの母体となりました「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」、この事業は今年度が最終年度です。今年はその総括の一年であり、このシンポジウムもその総括のための行事の一つです。今後の予定としては、七月から九月にかけて東京の文部科学省の企画展示室において人間文化研究機構を構成する国文学研究資料館、国立国語研究所、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所の四つの研究機関がそれぞれに可視化・高度化事業の総括の展示を行うことになっております。また来年の一月から二月には、同じく人間文化研究機構の研究機関の一つである千葉県佐倉市にあります国立歴史民俗博物館において、もう一つの総括シンポジウムと展示を開催する予定です。どうぞご関心のある方はぜひお運びください。

これら一連の総括の行事を通じて、この「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業」はひとまず終了になりますが、社会の抱える諸課題に向き合い、研究の成果を社会に還元させることは人間の文化や社会を研究対象とする人間文化研究にとっては基本的なスタンスです。とりわけ大きな博物館を擁する人間文化研究機構としては、その強みを最大限に生かして研

究成果を社会に伝え、分かち合うことが使命の一つだと考えています。

この事業はひとまず今年度で区切りを迎えますが、現在、今後もうこうした事業を継承発展させるべく計画を立案しているところです。この点も含めまして今後のご支援をお願いするとともに、今日のシンポジウムへの参加につきまして改めて御礼を申し上げて閉会のご挨拶いたします。どうもありがとうございます。

※新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のため、文部科学省の企画展示室での展示開催は、二〇二二年二月から三月までの期間に変更となった。

川村 清志 (かわむら きよし)

所 属 国立歴史民俗博物館 准教授

専 門 分 野 日本民俗学、文化人類学

研究テーマ 口頭伝承の近代的展開、祭礼芸能の実践と習得過程の探求、メディアによる民俗文化の再表象過程、現代日本のサブカルチャーと伝統文化

主 要 業 績 『明日に向かって曳けー石川県輪島市皆月山王祭の現在』(DVD 監督、2016年)

『石川県輪島市山王祭フォトエスノグラフィー準備編』(倉本啓之と共編、2018年)

『民俗学読本—フィールドへのいざない』(編著、晃洋書房、2019年)

『石川県輪島市山王祭フォトエスノグラフィー祭日編』(倉本啓之と共編、2021年)

劉 建輝 (りゅう けんき)

所 属 国際日本文化研究センター 教授

専 門 分 野 日中文化交渉史

研究テーマ 日中をはじめとする近代東アジア全体の文化的相互影響、相互干渉の追跡

主 要 業 績 『帰朝者・荷風』(明治書院、1993年)

『増補・魔都上海—日本知識人の「近代」体験』(ちくま学芸文庫、2010年)

『日中二百年—支え合う近代』(武田ランダムハウスジャパン、2012年)

日高 真吾 (ひだか しんご)

所 属 国立民族学博物館 教授

専 門 分 野 保存科学

研究テーマ 民俗文化財の保存修復技術の開発、博物館の資料保存

主 要 業 績 『女乗物—その発生経緯と装飾性』(東海大学出版会、2008年)

『記憶をつなぐ—津波災害と文化遺産』(千里文化財団、2012年)

『災害と文化財—ある文化財科学者の視点から』(千里文化財団、2015年)

『継承される地域文化—災害復興から社会創発へ』(臨川書店、2021年)

西村慎太郎 (にしむら しんたろう)

所 属 国文学研究資料館 教授
専 門 分 野 日本近世史、アーカイブズ学
研究テーマ 近世身分制、地域歴史資料の保全
主 要 業 績 『近世朝廷社会と地下官人』（吉川弘文館、2008年）
『宮中のシェフ、鶴をさばく』（吉川弘文館、2012年）
『生実藩』（現代書館、2017年）
『大字誌浪江町権現堂』のススメ』（いりの舎、2021年）

木部 暢子 (きべ のぶこ)

所 属 国立国語研究所 特任教授
専 門 分 野 日本語学
研究テーマ 日本の方言、音韻・音声、アクセント
主 要 業 績 『日本語アクセント入門』（編著、三省堂、2012年）
『そうだったんだ日本語 じゃって方言なおもしろいか』（岩波書店、2013年）
『方言学入門』（編著、三省堂、2013年）
「消えゆく言語・方言を守るには」（『國學院雑誌』119-11、2018年）

吉田 丈人 (よしだ たけひと)

所 属 総合地球環境学研究所・東京大学大学院総合文化研究科 准教授
専 門 分 野 生態学、陸水学
研究テーマ 生態系を活用した防災減災、人と自然の関わりの伝統的知識、湖沼など淡水生態系における生物の多様性や相互作用
主 要 業 績 『シリーズ現代の生態学6：感染症の生態学』（日本生態学会編、川端善一郎ほかと編集担当、分担執筆、共立出版、2016年）
『生態学 基礎から保全へ』（鷲谷いづみ監修・編著、一ノ瀬友博、海部健三、津田智、西原昇吾、山下雅幸、吉田丈人共著、培風館、2016年）
『実践版！グリーンインフラ』（グリーンインフラ研究会ほか編、分担執筆、日経BP、2020年）

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」ブックレット

新しい地域文化研究の可能性を求めて vol.10

発行日／2021年11月30日

著 者／西村慎太郎・木部暢子・吉田丈人・川村清志・劉建輝・日高真吾

編 者／高科真紀・セリック・ケナン

発 行／人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト

「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」

印 刷／株式会社 弘 文 社

新しい地域文化研究の可能性を求めて

Vol.10 2021年11月

- 多角的な視点から捉える地域の文化
 - ―博物館における研究の可視化・高度化

西村慎太郎

歴史と地域文化―福島県浜通りの歴史

木部暢子

方言と地域文化―八重山の方言と東北の方言

吉田丈人

環境と地域文化―滋賀県比良山麓の恵みと災い

川村清志

映像のなかの地域文化

―石川県輪島市皆月のくらしと祭り

劉 建輝

アジアにつながる地域文化

―上海・長崎・大阪という文化街道

日高真吾

日々のくらしと地域文化―新潟県奥三面の山のくらし

パネルディスカッション

コーディネーター：渡辺浩一

パネリスト：西村慎太郎・木部暢子・吉田丈人・

川村清志・劉建輝・日高真吾

人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト
「日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築」